

KSKP サロン・あべの

No. 50



出合い ふれあい 助け合い

思い出してください、この五年。

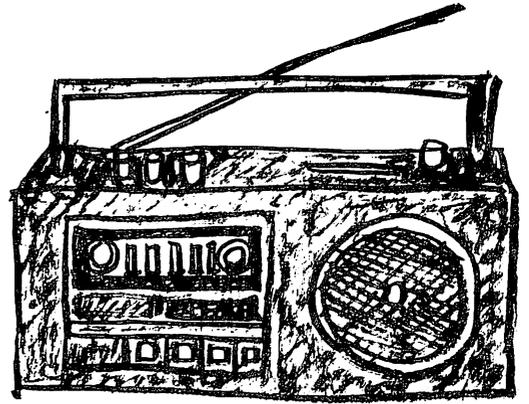
石田 律・四

おめでとう、そしてありがとうございます。——十四

この世は出会いふれあい助けあい	秋野 富美子・十四
「元氣が出る」サロン紙	足立 裕子・十五
出会いはハッピー	今西 美奈子・十五
勉強の場に	植松 菊雄・十五
ハサロン・あべのV五周年を祝して	A子・十五
出会いを楽しみに	大里 哲子・十六
あやまちをおかす権利	岡本 栄一・十六
触らぬ神に……というけれど	小倉 寛一・十八
勉強はサロンで	加賀谷 正・十八
車椅子に手引きされて	柿岡 忠・十八
歩み 楽しく	柿岡 緑・十八
輪から和へ	金子 花江・十八
一読者として応援します	黒羽 玲子・十九
ふれあいの五周年	梶谷 終一・十九
今後の発展を祈って	心の灯・十九
出会い ありがとう	小嶺 佐美子・二〇
これからもサロン	斉藤 孝文・二〇
オシャレは 楽しい	崎本 ヒサエ・二〇
継続に敬服	生野 正明・二〇
連なかりはサロン紙	高尾 澄男・二二
サロンで情報交換	竹村 定子・二二
おめでとう	田中 美智子・二二
情報一杯の「本」?に	田中 真知子・二二



目次



体がついて行くかぎり・・・・・・・・塚脇 えみ・二二
 離れ難い サロン・・・・・・・・出口 正敏・二二
 成長するサロン・・・・・・・・匿 名・二二
 お風呂の話にショック・・・・・・・・中川 雅子・二三
 ぼくにとっての

「サロン・あべの」五周年・・・・・・・・牧 口 一 二・二三
 おめでどう五周年！・・・・・・・・中野 君 江・二四
 なんとか 載せてほしいの・・・・・・・・松葉 玲子・二四
 おめでどう・・・・・・・・松本 孝・二四
 温かい出合いを求めて・・・・・・・・丸山 寿美子・二五
 オメデトウ、オメデトウ・・・・・・・・まんだによしゆき・二五
 サロンの輪拡がれ・・・・・・・・柳生 幸子・二五
 出会い様々・・・・・・・・山本 鈴子・二五
 ハンパじゃないよ・・・・・・・・山本 匡子・二五

つぎの五年がまた、楽しみです。——二六

五周年にあたって・・・・・・・・旭 純子・二六
 サロンは何色？・・・・・・・・上平 幸雄・二七
 「サロン・あべの」と私と夢・・・・・・・・河合 恵子・二八
 ガンバります・・・・・・・・山本 篤江・二九
 サロン・あべの振興計画・・・・・・・・原田 仁・三〇
 いつでも「出合いの場所」として・・・・・・・・南光 龍平・三四

「サロン」があるまち・・・・・・・・前田 博子・三五
 もうひとつのサロン・・・・・・・・岡 知史・三八
 点から線へ・・・・・・・・富田 慶子・四四



思い出してください、この五年。



△サロン・あべのVは一九八六年三月二十九日以来五年、いろいろな出会いの場づくりをしてまいりました。

一九八七年は「結婚」をテーマにつくりました。翌一九八八年は「ストレス」を、年間通して考えました。四年目の昨一九八九年は「コミュニケーション」でした。その年、年に、大きな基幹テーマを設け、それを中心に毎月々の出会いの場をつくってきました。

時流にのって消費税をテーマに、話を聞いたこともありました。クジラの骨を見にいきました。クリスマスにはサンタクロースからプレゼントをもらいました。新年会も楽しかったです。

共に生きる地 友社会に	ミニ新聞 NO. 1
〈サロン・あべの〉	発行日 昭和61年7月19日(土)
障害者のためのセッションを	発行所
	〈サロンあべの〉運営委員会

本日の出会い 7/19

『国民年金法改正について』
パートⅡ

講師 高橋 芳樹氏

前会(4月)のご質問に答えていただきます。
(本日の同会 - 井上 恵一)

初めての見学
リハビリテーション
センター行

6月20日(土)の午後、市身協のバスあゆみで、大阪市立心身障害者リハビリテーションセンター(野区喜連西6-2-25)の施設見学に出発しました。

当日はあいにくの雨でしたが、阪南ボラテアあべのボランテア連絡協議会(ビートルボランテア)他友人知人を含めた30名が参加しました。

その内障害者10名(車イス使用者)は各々に参加者の皆様に手紙をいただいた。その中、江田麻には力強い挨拶をしていただきました。

おまわりしていただきました。ありがとうございました。

参加者(障害者)の方からお礼の電話をいただきました。

サマリアリハビリセンターは、次のような業務内容が行われています。

○相談・判定・療育・障害者の医療・休養・職業訓練
取組等の相談と、個別訓練
精神障害者に対する母子通所による短期訓練です。

ようこそ

サロニアあべのへ

本日はサロニアあべののついでにご出席下さいます。ご質問があれば、お気軽にサロニアあべのへご連絡ください。

重度の障害者(車イス)の方には自立生活の促進のための訓練を行う。

○職業更生訓練(就職をめぐる障害者が対象)

情報処理科(学方高卒)

コンピュータグラフィックス

年・販売業務コース/年

システム印刷コース/年

紙器製造科(学方高卒)

貼箱を中心とした糊箱製造と生産指導。

以上の科の説明を管りて後、各科の見学をします。

おみやげ(紙器製造科)で造ったお菓子をいただきました。

ご質問はいつでも構いません。

お名前(フリガナ)とご連絡先(住所)を教えてください。

サロニアあべのの予定

8月2日(日) 役員会

8月6日(木) 全体会

9月6日(日) 役員会

9月20日(土) あべの

「コミュニケーション・アワード」と題して

「あべのカーニバル」に参加します

日時 7月20日(土) 午後3時

場所 平野区役所(平野区工芸センター)

おねがい
カーニバルに販売出来る家庭の不用品を出品して下さい。売上金はサロニアあべのの運営費に使われます。

サロニアあべの先
あべのボランテア
TEL. 06-628-3434
(月・水・土・日・夜)
阪南野区阪南町徳
5-15-28 第1ビル
コミュニケーション

創刊号

雨にたゞられてダッハラんどへは行けませんでした。ビシヨヌレのあべのカーニバルも経験しました。そこでたくさんの人びとと出会いました。そして、ふれあいがありました。

その出会いの様子を伝えようと一九八六年七月一九日、文字どおり手づくりの新聞をだしました。新聞「だけ」のふれあいという方も出来ました。号を追

うごとに親しまれ、寄稿してくださる方も増え、福祉広報紙コンクールで三年連続で賞を受けました。

ハサロン・あべのVが出来て五年、ほんとうにいろいろなことがありました。新聞は五〇号になりました。その情報の量たるやぼう大なもの。思い出してください、この五年を……。

(石田 律)

■一九八六(昭和六一年)

三・二九 ○ハサロン・あべのV発会式

記念講演「ちがうことこそばんざい。共に生きる社会をめざして」を牧ロニー(グラフィックデザイナー・大阪 市立大学・桃山学院大学障害者問題論非常勤講師)氏に。

四・十二 ○男性ボランティアグループとの交流会

四・十九 ○国民年金法改正について パート1

パネラー 井上憲一(セルフ社代表)氏

五・十七 ○阿倍野今昔―温故知新

岡田浅吉(区身協役員・札所巡り役員)氏に阿

サロン、あべの発会式

主催 サロン、あべの運営委員会
後援 あべのボランティアビューロー



サロン、あべの発会式

倍野区の神社仏閣旧跡について話を聞く。

六・二二
○市立リハビリテーションセンター見学
初の見学会

七・十九
○国民年金改正法について パート2

高橋芳樹氏に障害者年金を中心に話を聞く

○機関紙ハサロン・あべのV創刊

B5版片面に手書きで月例会の内容報告をかねて発刊。例会出席者に配る。

七・二七
○あべのカーニバル参加

初参加でも大いに成果上る。

八・二四
○岡さん、前田さんの歓送迎会

岡 知史氏は上智大学へ赴任。その後任にあべのボランティア・ビューローへは、前田博子氏着任。

九・二十
○コミュニティとボランティア

お互いの悩みやボランティア活動の内容などを話あい、地域での活動を考える。

十・十八
○障害者が語る地域社会

障害の違う四氏の体験を中心に地域社会を話し合う。

十一・十五
○あべのボランティア・ビューロー交流会に参加

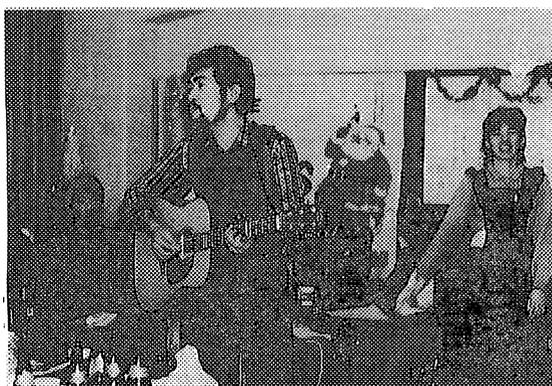
あべのボランティア・ビューローについて話し合う。

十二・六
○ほっこり幸せ クリスマス

○昭和六一年度大阪市ボランティア活動振興基金助成



市立リハビリテーションセンター見学 (昭和61・6・21)



ほっこり幸せ クリスマス (昭和61・12・6)

第十四回あべのカーニバルにバザーで二度目の出店。地域の人達との出会い・ふれあいの場を持った。

九・十九 ○結婚—その生活（聴覚障害者を中心として）

新婚三ヶ月の辻田夫人と、子育て真最中の上野夫人に、聴覚障害者とおしの結婚生活について話を聞く。

十・十四 ○ボウリング大会—スポーツの出会い

長居の市立身体障害者スポーツセンターで、初のボウリング大会を開く。

十一・十四 ○交流会—みんなで楽しくミニハイキング

あべのボランティア・ビュロー、阿倍野区老人福祉センター主催の交流会に参加。秋の陽の下、長居公園で楽しくあそびごころを解放。

十二・五 ○手づくりの、ハッピー・クリスマス

参加者のかくし芸、紅白に別れてのゼスチャーゲーム。全真合唱等なごやかなクリスマスを開く。

十二・九 ○阿倍野区ボランティア交流会（第二回）

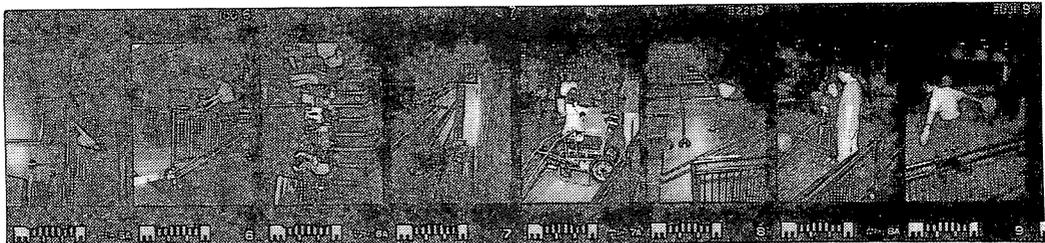
地域のボランティアグループと地域婦人会・保健所の方々と交流。

十二・二三 ○昭和六三年度大阪市ボランティア活動振興基金助成

金を受ける。

■一九八八（昭和六三年）

一・十六一〇にぎやか新年会



ボウリング大会—スポーツの出会い（昭和62・10・14）



交流会—みんなで楽しくミニハイキング（昭和62・11・14）

あべのベルタで「にぎやか」な新年会を開き、
話の花を咲かせた。

二・二〇

○車イスが見た韓国、ハワイ

車イスで韓国、ハワイを旅された南光龍平氏に
両国の様子と障害者の外国旅行について聞く。

三・十九

○与謝野晶子 歌と書のハーモニー

リフトバスで、堺百舌鳥にある大仙公園内の博
物館見学。堺の歴史と、与謝野晶子の「歌」と
「書」を觀賞する。

三・二七

○「88ふれあい広場」展示部門に参加

大阪市社協他主催の障害者と健常者の「ふれあ
い広場」での出会いを求めて参加する。ハサロ
ン・あべのVを紹介したチラシと本紙二二号配
布。ハサロン・あべのVの活動を撮った写真等
を展示してPRする。

四・十二

○地域福祉―育て草の根

誰もが住みよい街づくり・地域づくりについて
西 勝彦（元生駒市々会議員）氏に話を聞く。

五・二二

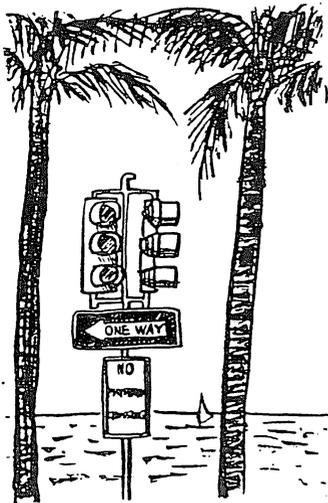
○ストレスで、なんやら

ストレスの原因・予防など輪郭について北田伸
彦（久米田病院心理検査担当技師）氏に聞く。

六・十八

○私のストレス解消法

大島功・斉藤孝文両氏に障害から来るストレス
とその解消法を聞き、参加者と一緒にお互いの
解消法について話し合う。



車イスが見た韓国 ハワイ
(昭和63・2・20)



「88ふれあい広場」展示部門に参加
(昭和63・3・27)



七・十六

○住いの工夫 いろいろ

商品化された建物や品物でなく、それぞれが自分に合うように考え、作った住いや道具について話し合う。

八・二八

○あべのカーニバル

第十五回あべのカーニバル「なんでも市」に参加。三回目でもあり、なじみも増えて出会い・ふれあい盛況となる。

九・十七

○私の歩いてきた道

肢体障害者の秋野富美子さんに、聴覚障害者の夫との出会いとその後の生活について話しを聞く。

九・二二

○府社協「福祉広報紙コンクール」で連続受賞

本紙が昨年が続いて「優良賞」を受賞。

十・二九

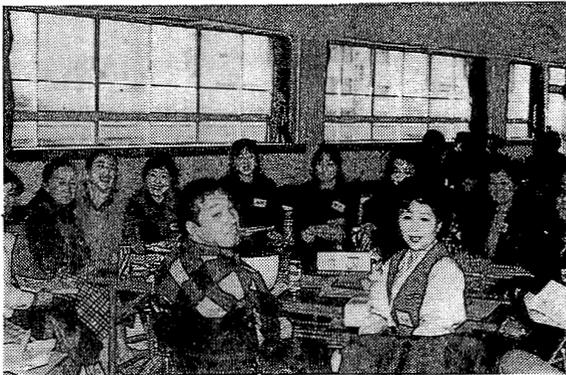
○みんなで集う交流会―長居公園へ出かけよう!

ボランティアスクールの受講生・一般のボランティアの方・たんぼぼ作業所の仲間達・老人福祉センター、デイケアサービス参加者・在宅老人の方々と共に、自然に学び、自然と親しむ。

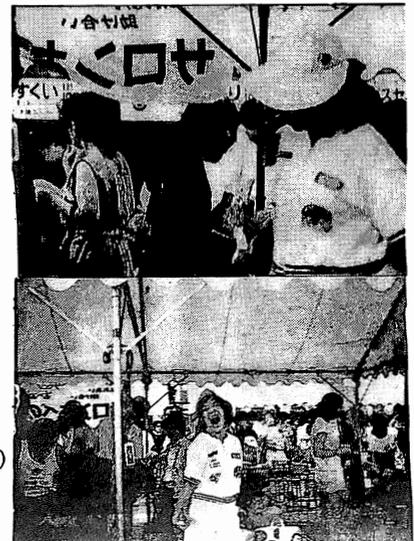
十一・十二

○たくさんさんの愛をありがとう

阿倍野区民ホールに於て「第三回阿倍野区ボランティア交流会―あなたの愛を地域福祉に」が開催され、映画「たくさんさんの愛をありがとう」を観賞した。その後「友愛・老人」「身障者問題」「給食サービス」「ボランティアの悩み」



たくさんさんの愛をありがとう (昭和63・11・12)



あべのカーニバル (昭和63・8・28)

「自由課題」等々のグループに分かれて話し合いを持った。

十二・三

○ときめきのクリスマス

ゲーム・ゼスチャー・クイズ・手話コース等で、ときめきのクリスマスを楽しむ。

十二・十四

○「大阪市ボランティア活動振興基金」の助成金交付。

■一九八九（平成元年）

一・二二

○わくわく新年会

あべのベルタ地下二階の「龍鳳」で、中華料理を味わいながら新年の抱負を語り合い、親睦を深める。

二・十八

○リバイティおおさか 見学

人間が幸せに生きる権利と自由に生きる権利があることを学ぶ。

三・十八

○サロン・あべの この二年をふりかえって

毎月の出会いを魅力ある場にしていきたいと考えつつ、この一年をふりかえった。

四・十五

○こんなところにも消費税が

岩永清滋（公認会計士）氏を迎えて、消費税の目的、仕組み、問題点等を聞く。

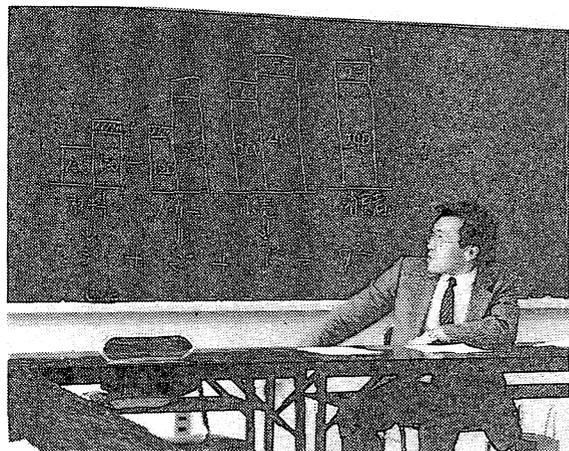
五・二十

○ダッハらんど（堺市大仙公園）見学Ⅱ雨で中止

六・十七

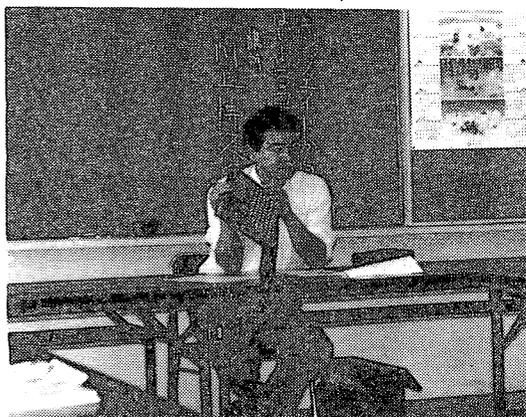
○トーキングエイドからはじまるコミュニケーション

川上博久（電子工学博士）氏が開発されたトーキングエイドに関するエピソードあれこれを聞く



こんなところにも消費税が（平成元・4・15）

トーキングエイドからはじまるコミュニケーション
（平成元・6・17）



く。

七・十五 ○私のコミュニケーション

参加者が主役になって交流の輪を大きく広げる。

八・十三 ○あべのカーニバル「なんでも市」

サロンのバザー店を出し多くの方々との出会いと交流を持つ。

九・十六 ○地域とコミュニケーション

定藤丈弘（府立大社会学部助教授）先生にコミュニケーションの意味と役割についての話とパークレー見聞録を。

九・二二 ○三度目の優良賞

恒例・府社協福祉広報紙コンクールで受賞。

十・二二 ○大阪の自然史をたずねて

市立自然博物館で、昔々大阪湾に鯨がいたという証拠の化石を見る。この後多生広場でお弁当を広げ、米国のボランティアの方と国際交流も。

十一・二五 ○ふれあい交流会

あべのボランティア・ビューローと区社協の主催でボランティアと老人・障害者が、センターの職員の指導でグループゲームを楽しむ。

十二・九 ○クリスマス＝サロン

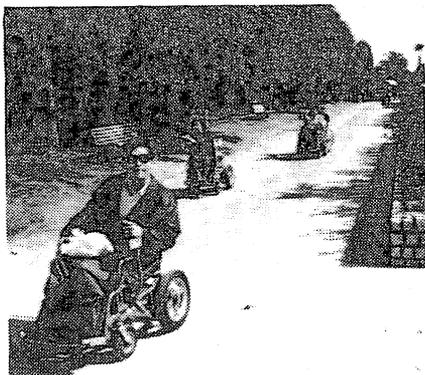
クイズ形式の自己紹介で各自の人柄に接したり、米国青年ボランティアのクイズで楽しんだり、サンタのプレゼント等々。

十二・十八 ○市ボランティア活動振興基金助成金交付



地域とコミュニケーション（平成元・9・16）

大阪の自然史をたずねて
（平成元・10・21）



■一九九〇（平成二年）

一・二十〇にぎやかに楽しくホノボノとした新年会

二・十七〇クリスマス＝サロンの思い出

「クリスマス＝サロン」（ビデオ撮影植松氏）

と「身障者は今（井上憲一氏とセルフ社）

⑤「TV」のビデオ観賞。

三・十七〇おしゃれて拡がるコミュニケーション

あいか彩子（ニットデザイナー）氏を迎えて、

こだわりを持ったリおしゃれりと福祉について

外国の様子も交えての話。あいか氏のニット作

品十二点も展示。

四・二二〇オムニマックス&プラレタリウム

大阪市立科学館サイエンスシアターへ。

五・十九〇あべのボランティア・ビューローの役割と活動

竹村安子（市社協）氏と吉岡知美（ビューロー）

氏を迎えてあべのボランティア・ビューロー

について聞く。ビューローグループと共催。

六・十六〇親はなれ子ばなれ「私の自立」

川島雅恵氏に現在の自立生活にいたるまでの、

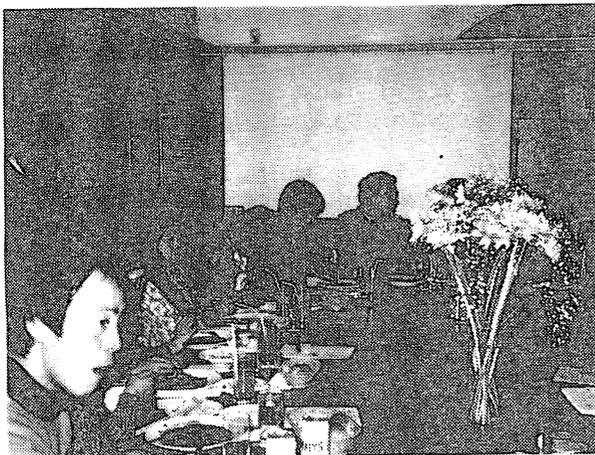
紆余曲折を。

七・二二〇親はなれ子ばなれ

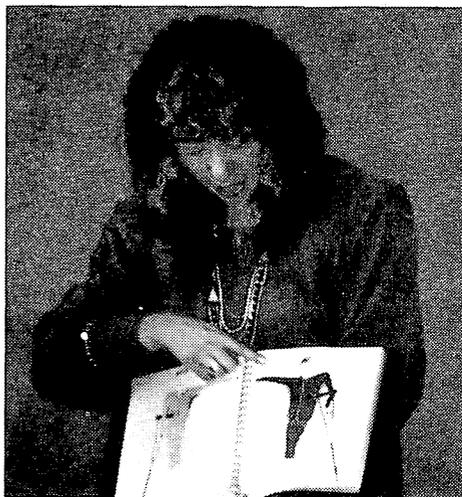
「障害者の自立を応援する親の立場から」

今井清行（堺自立の家代表）氏に、親の立場か

ら障害者の子供の自立について話を聞く。



にぎやかに楽しくホノボノとした新年会（平成2・1・20）



おしゃれて拡がるコミュニケーション（平成2・3・17）

おめでとう、そして ありがとう。

50号記念誌にと、〈であい・ふれあい・助けあい〉のキーワードで、みなさまに「ひとこと」をお願いしました。そうしましたら、来ました。届きました。いろいろな出会いが寄せられて来ました。なかには、思わぬふれあいの悦びを書いた原稿も届きました。例会で出会ったあの人、この人…の顔を思い出しながら、お読みになってください。また、お読みになってから、例会でお会いになられては、いかがでしょう…。

大体50音順になっております。

この世は

出会いふれあい助けあい

秋野 富美子

一昨年（昭和六三年九月）私は、初めて富田慶子さんたちの運営するサロン・あべののグループとの出会いを持ちました。

この出会いのきっかけとなったのは、昭和六〇年の六月から阿倍野の手話講習会に参加し、以来手話サークルとの関わり上、聾啞問題に活躍されている旭純子さんの引き合わせであった。そして、その手話との出会いは、当時一講習生だった聴覚障害者のFさんとの出会いにあった。

この様にたどって行くと人生人との出会いは、みんな誰かのお陰で誰かと出会い、温かいふれあいのお陰で、又次の誰かと出会う。目に見えない一本の糸で結ばれている様で、何とも不思議でならない。

中でも、富田さんとの出会い

は、もっと不思議でなりません。ずっとずっと昔、お互いに名前も知らないで大阪市大の病院内で、出会っている。看護婦さん

が呼んだ「けい子ちゃん」と云う名前と白髪のおばあさんが押している乳母車に乗せられた五六才の少女。「どこが悪いのですか」と聞いた私に「全身の関節がリューマチで自由がきかないですよ」と云われたおばあさんの言葉がはつきりと記憶し、前を通り過ぎる人を目だけで追っていた可愛い少女の様子が頭の中にやきついていました。

私も当時は、十九才で股関節脱臼の手術は失敗に終り、膝から下麻痺した右足を引きづって松葉杖でやっと院内を散歩出来る様になった時の事です。昭和二六年の初秋頃です。感覚のない腫れ上った冷たいまっ黒の右足を見ていると気が滅入って泣きたくなる、そんな時いつもけい子ちゃんを想い出して、あの

小さい女の子が必死で全身のリーマチと闘っているのだと自分に云い聞かせ励まして、気を取り直していたものです。

だから「けい子ちゃん」の面影はずっと私の脳裏にありました。折りにふれては想い出して「けい子ちゃん」も頑張ってるかなと何度思ったことか。

それが昭和六三年九月思いもかけずに出会ったのが、富田慶子さんだったのです。勿論すぐには、誰だか全く分りませんでした。話を聞いてびっくりするやら懐かしいやら、ずっと快くなってお元気に活躍されてる富田さんに思わず拍手を贈りました。

逆境に立たされてなお自分の課題、目標がすえられるこの芯の強さが自己成長の夢を大きく実らせていくのだと思います。

本年は、サロン・あべの発足五周年、誠にお目出度うございます。富田さんのエネルギーギッシユなご活躍に敬意と惜しみない

拍手を贈ります。

今後共、益々の御活躍をお祈りします。

「元気が出る」サロン紙

足立裕子

「元気が出る」機関紙を毎回ありがとうございます。

地に足ついた日々の生活や、実践から出る言葉は、大変力強く説得力があります。

その言葉に、私はいつも励まされ、うならされます。

出会いはハッピー

今西美奈子

サロン・あべの紙五〇号記念紙おめでとうございます。いつも楽しく拝見しております。

私は「まごころの集い社」の会員で、富田慶子さんとは古くから親しくさせていただいております。沢山歩く必要のある時

は車椅子を使いますが、日常の暮らしは松葉杖で何とかやっています。昨年「身障者団体」は「まなす大会」に、車椅子百米走と背泳二五米に出場し、金と銀をもらって来ました。メダルよりも、又新しい友達が沢山できたことが、とてもハッピーでした。良い出会いに又恵まれます様に。

勉強の場

植松菊雄

五周年記念おめでとうございます。私も仲間入りさせてもらって二年になります。その間行事参加も数える程ですが、多くの人達との交流を心がけ、勉強の場にさせてもらっています。

これからもより多く参加できるように努力致しますので、よろしくお願ひ申し上げます。

サロン・あべのの益々のご発展を祈っております。

△サロン・あべの▽
五周年を祝して

A子

お目出度うございます！

あべのボランティア・ビューロー発足後、岡様よりの紹介にて、出会いがはじまりました。もう、四年以上にもなるのですね…。それだけ年齢を重ねた事にもなりますが…。何のとりえも、ボランティアする事もなく今日に至りました。

でも、あの方とあんな話をし、この方とこんな話をと、色々の出会いがあり、勉強させられました。時には施設の見学、クリスマスパーティー、新年会等々、毎月切れる事のない話があり、楽しい出会いがありました。

運営委員の裏の作業は大変ですね。企画及び編集、原稿依頼等ご苦労と思いますが、頑張っ下下さい。私も、健康の許す限り、楽しい出会いに参加したいと思っておりますので、よろしくね…。

出会いを楽しみに

大里 哲子

「サロン・あべの」五周年記念並びに「サロン・あべの」紙五〇号記念を、心よりおよろこびいたします。「サロン・あべの」の集いにはまだ一度も参加させてはいただいていない私でございますが、御紙を通して皆様 of 明るい魅力ある着想、発言等が手にとる様にわかり、如何にも現代人らしくて、力強く頼もしい思いをさせてはいただいております。従って御紙が届くのが楽しみで待ち遠しい位でございます。私の手許にはまだ二、三冊しかありませんが、既に五〇号とは、この紙を生み育ててここまで成長させてこられた皆様の熱意の程に敬服いたして居ります。私も是非「サロン・あべの」に参加させていただき、皆様との気の張らないおつき合いをさせていただきたく希いなながら、いつも都合がつかず残念に

あやまちをおかす権利

聖カタリナ女子大学

岡本 栄一

松山にきた頃、こんな情景に出会った。ある小さな書店に立ち寄って本をあさっていた時のことである。

その書店のカウンターで、店主とおぼしき男性が、次ぎつぎと慌ただしく幼稚園らしき所と電話を入れては、その幼稚園の誰かが、本の注文をしなかったかどうかを尋ねているのである。

そして、二、三個所問い合わせて確認が得られないと、そのそばの、しょぼんと頭をうなだれている二五歳ぐらいの、右手に障害のあると思われる女性を意識にいれながら、それとなく、低い声で

「何歳位の女の人の声だったかねえ。困ったな」とか、「ちよっとメモしとけばよかつたのになあ」とか

とかいって、こぼしているのである。

わたしには、状況はすぐ理解出来た。受付の障害をもっている当の女性が、幼稚園から本の注文を受けたものの、どこの誰が注文したかをメモしていなかった、というものである。（わたしは、この女性は少なくとも左手で文字が書けるものと判断した）

ただ救いとして感じたことは、その店主らしき男性が、彼女に対して、強くしかっている風ではなかったことである。

こうしたことは、障害をもった当の女性にとっては、初体験だったかも知れないが、こうした電話の注文の際は、用件、相手の名前、電話番号などをメモすること位は、今日のような電話時代なら常識だと、いえはいえよう。

たいていの人は、中学生位の頃から、親の留守の時にかって来た電話先の名前あるいは電話番号を、うっかりメモをせず忘れて、こっぴどく叱られた経験があろう。人はそうしたあやまちや苦い失敗の経験から、メモをとること、さらに改めて反復して、先方の住所や電話番号に間違いがないかどうかを確認することを覚える。失敗を土台にして、こうしたことが如何に大事な行為であるかを認識するのである。

これは、電話を受けた時の失敗の話だが、人生の半分は、失敗の経験で埋っているのではないかと、と思うことがある。考えてみれば、人は数多くのあやまちや失敗を成長の糧にして大きくなるのではないか。たとえば、駅を間違えたり、汽車に乗り遅れたり、忘れ物をしたり、物を盗られたり、といった数々の失

思つて居ります。とは云つても先に、二回程阿倍野区肢体障害者協会の皆様との旅行に同行させていただき、又今年の区身協新年会でも何人かのサロン参加の皆様にお目に掛り、健常者の

私の方が色々な面で学ばしていただき勇気づけられて居ります。神様は私達人間を決して不公

平になさる方ではなくその人、その人に必ず生き甲斐と幸せを

与えて下さる事を信じてお互いに努力し、学び合ひましょう。

皆様のご多を祈りつゝ、お目に掛れる日を楽しみにいたして居ります。

サロン五周年に寄せて

大 戸 睦 美

去年の十一月からサロンを通して障害を持った方達と知り合ひになりました。最近何故か、自分の家族の事をいろいろと考える様になりました。

敗の経験があつて、それを土台に社会を知ったり、人と人とのつながりのコツなどをおぼえる。こうした経験から人は生活の幅を創っていくのである。

先日、『花になれ、風になれ』という、「たんぼぼ運動十六年の記録」を綴った本が送られてきた。奈良が生んだ「わたぼうしコンサート」でよく知られている運動である。この本の最後の方に「たんぼぼ憲章」というのが載せられている。

この憲章は八章で構成されているが、その六章に「その人が挑戦し、あやまちをおかすことができる」というのがある。一般の人が見ると、この「あやまちをおかすことができる」という言葉は、どういう意味なのか理解しにくいかもしれない。そこで、少し説明すると、この憲章は、障害者の授産施設である「たんぼぼの家」の憲章だとい

えば、わかつてもらえたらう。障害者施設をつくと、「あれをしてはいけない」「これをしてはいけない」と、ついつい管理的な発想になってしまう。

それでは障害者の社会性は養われない。自立は促進されない。そこで、「あやまちをおかすこと」といった、やや過激な表現ながら、障害者の主体性を尊重し、多少のリスク（危険）を侵してでも社会性や自立性を伸ばそうという発想から出た言葉だ、と理解したい。

経験ということで言えば、障害があることのために、親やその周辺の人たちから「禁止の制限」が加えられ、経験の幅が狭められやすい。事故とか失敗を怖れる結果として、当の障害者自身の社会性や自立性が欠乏することになる。先の電話の事件も、そうしたことから起こっていると思ふ。

「たんぼぼの家」の憲章も、こうしたことの反省として謳われているのであろう。

富田さんから、「サロン・あべの」が五周年目の五〇号を迎えるから、その記念号に何か書いてほしいとの、メモ風の手紙を二回ももらつて、断ろうと一度は思ったものの、やさしさのこもった富田さんの筆運びと、あの温顔を思い浮べ、断つたらバチが当ると思い直して、最近こちらにひっかかっている「あやまちをおかすこと」について書いた。

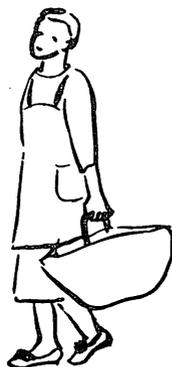
一見ささやかに見えるサロンの活動も、障害をもった人達にとっては「社会的な経験」の幅を広げる大きな役割を果たしているように思ふ。地道な歩みながら、さらに十年へ、百号発刊に向けてがんばってほしいと思ふ。

触らぬ神に……というけれど

小倉寛一

当麻寺へ牡丹見物の予定が、珍客で中止となり、家内が駅まで送って行った。その帰宅途中で、単車の男が人事不省で倒れているのに出くわした。慌てて何とか……?と云うので百十番通報をした。住所・氏名・電話も聞かれ、もう一度状態を見てくれと言われ、急いで元の場所に戻ると、友らしい人がいる。

百十番をしたと云うと、困惑顔で「救急車が来たら運転免許



証を取り上げられるから、断つてくれ」と拝む様に頼むので、

フーフー云いながら、再度、百十番へ連絡を入れた。「今、行ったが誰もいなかった」と。

嘘も方便と云うが、しんどいめをして二度も百十番をした。

「吾不関、触らぬ神に祟なし」と云う此の頃の風潮であるが、それが出来ない鈍な男。

勉強はサロンで

加賀谷 正

僕は、三人の障害者の外出介護や泊まり介護をしていますが、サロンでは介護をしていないので、いつも勉強させてもらっています。

車椅子に手引きされて

柿岡 忠

サロン・あべの五周年
おめでとございます。

歩行運動のため、よく車椅子の後ろについて歩き廻り、街に

車が溢れているのに今更ながら驚かされる。車椅子からは、自動車が悪魔のように、車から見ると車椅子がウロチョロ動き廻るのがウルサク見えるであろう。

どうしても、許せないのは、歩道に乗り上げた車が道をふさいでいることだ。段差があるのですぐ車道に出られず、迂回して危険な車道を通らなければならぬ。この場合視力障害者が

白杖を頼りに一人歩きしている時だったらどうであろうか。許せないことだ……。

歩み 楽しく

柿岡 緑

結成五周年 おめでとございます。
います。

美しく咲いたあじさい、丹精して育てられたこぼれるばかりの花々を眺めながら、大自然の

外気を一ぱいに浴びるのは、楽しい。

二月のサロンの出会いに参加した時、ビデオで知ったセルフ社の井上氏ご一家の充実した社会参加を拝見して、私も謙虚に大空を見つめて歩んで行きたいと思えます。

輪から和へ

金子花江

サロン・あべのの皆様の輪がしっかりと結ばれて、世間へ広く歩み出されたその実りが、今日五周年という記念日を迎えられました。お一人毎に握手させていただきます。ここには、並々ならぬお世話なり、まとめ役なりのご努力があつてこそと思えます。サロン紙の頁も増え、内容もなかなかユニークで読み応えがあり、何か示唆を残して下さいます。

これからも、和から生れる集いの方向を目指されて、注目のサロン紙となることをお祈りします。

一読者として応援します

黒羽玲子

サロン・あべの発行五周年おめでとうございませう。こういう機関紙を他に読んでいるわけはありませんし、ボランティア活動をした経験もないのですが、サロン・あべの紙は、とても内容が充実していて毎回、読むのが楽しみです。以前、お風呂の事が載っていましたが、入浴が身障者にとって楽しみどころか大へんな事だなんて、とてもショックでした。我家には、主人が飲んで遅くに帰る為、二階にシャワールームをつけました。これは畳半帖程の窓も何もない電話ボックスのような物ですが、シャワーを出し続けて入る

と、真冬の朝でも暖かく、出てしばらくは、セーターを着る気がしない位です。これだと、スペースも大していらぬし、椅子に座ったまま入れるのではないでしようか？

ペンネーム(知)氏のエッセイは、いつも一番先に読ませていただいています。少年との出会う話、手紙の話、免れていくこと……みんな心に残る話ばかりです。

ふれあいの五周年

梶谷 終

人生において、ふれあいはとても大切である。しかし、このふれあいをするためには、出会いがなければならぬ。

私の最初の出会いの場がサロン・あべのだった。当初は知っ

ている人もわずかであったが、回を重ねるうちにいろんな人を知った。今年はサロン・あべの結成五周年。これは私の五周年でもあるように思える。これからも私達にふれあいを与えてくれる会として、永続して欲しいと思う。

今後の発展を祈って

心の灯

創立五周年 お目出度うございませう。心から拍手を贈ります。

「サロン・あべの」の機関紙は、表彰に値するすばらしい編集です。何時もうれしく拝見して居ります。

サロン・あべのこそ、健常者

・障害者をとわず、お話し合い、おしゃべりに、お茶を友として花を咲かせる集い。

私は、グループの中のお一人を永年心の灯とし、長い年月ずっと心の糧として己を育んで来

ている目標の人がおられます。その方は、斉藤さんです。私がボランティアを始めた頃、山本早苗ちゃんのお母さんからのお話で知ったのです。過日のサロンに投稿してくれた文章を拝見して、今更乍ら敬意を表しました。心ない人達の言語・仕草に對して、彼の寛大な気持に對し、その心情を思うときもあろうにあゝそうだったのかと、思い知らされる事の数々、頭が下りま

す。サロンの場では、皆さんとお話し合いも出来ませんが、心おきなく話しあってお互いのコミュニケーションを密にしているだけだと、願って居ります。

富田さん・石田さん達の豊かな志想のリーダーの元、どうぞ増々の御発展を希望して居ります。手をつないで、スクラム組んでサロン・あべのを高めていき



毎月のサロンに出席すると、

お友達が出来るので、私も頑張
って参加していききたいと思っ
ています。

そして、今年は五周年とのこ
と、おめでとうございます。

運営委員の皆さん、ご苦労様
です。△サロン・あべのVが、
いつまでも続くことを心より、
お祈り申し上げます。

これからもサロン

斉藤 孝文

サロンもいよいよ、五周年を
迎えられて、運営委員の一人と
して大変嬉しい限りです。

サロンを通じて多くの出会い
ふれあひを受けました。そうし
た中でやはり、人間にとって、
特に障害者にとって、友情の輪
真心がいかに大切かあらためて
考えさせられました。

私事で恐縮ですが、この時期
にある事情でアベノから遠く離

れた橿原に引越すことになり、

とても悲しいのですけれど、し
かし、また新たな決意をもって
友達を作っていきたいと思っ
ています。

これからもまた、チョコチョコ
クサロンへ顔を出しますから、
よろしくお願いします。

段々と順調に育って来たサロ
ンですから、五年と言わず十年
二十年続くように、私も徹力な
がら応援いたしたいと思ってい
ます。

オシヤレは 楽しい

崎 本 ヒサエ

私とサロン・あべのの出会い
は、もう二年にもなるが、その
わりには出席率が悪く、今まで
に五回だけです。その最も新し
いのが新年会です。あの時の楽
しさと温かい雰囲気は、今も私
の心に余韻を残しています。
名前を覚えるのが苦手なので

すが、赤色のオシヤレを楽しん
で居られた方に、心より拍手を
送りたいと思います。

オシヤレは、誰が見ても楽し
く、亦素晴らしいものです。

今後とも、頑張って色々と素
敵なオシヤレを考え、チャレン
ジして欲しいと思っています。

継続に敬服

生野 正明

拝啓、早や梅雨の到来を思わ
せるような日もありますが、お
元気でご活躍の様子、大変うれ
しく思っております。サロン・
あべのの発行も五〇回を教え敬
意を表します。会報を継続する
ことは本当に大変なことだと思
います。最近の紙面を拝見して
いますと、多角化した活動ぶり
が伺え頭が下がる思いです。
その点、私たちの友の会(リ
ユウマチ)の活動はマンネリ化
しているようで反省させられて

出会い ありがとう

小 嶺 佐栄子

△サロン・あべのVには、富
田さんが、おさそい下さいまし
て、初めて皆さんとの出会いを
持ち、心より楽しませていただ
きました。又、色々なところへ
見学させていただいたりした時
は、ボランティアの皆様方にご
親切にしてください、心より感
謝しております。ほんとうに、
お世話様になりました。

います。今後の活動の在り方につきご教示いただけたらと思っています。

これからの季節は、私たちリユウマチ患者にとつて好ましいとはいえませんが、無理をしないようにして、十分にご自愛いただき乗り切ってください。

連ながりはサロン紙

高尾澄男

僕がサロン・あべのに参加して、早や四年になろうとしています。毎月色々なテーマで、講師を招いてお話をしていただき、その話題を元にして、皆さんで話合ったりして、障害者と健常者とのふれあいが出来て、本当にいいなと思います。僕はこの一年間色々忙しくて、サロンには出席していませんが、サロン紙を送っていただいているお陰で、その時々サロンの様子が伺えて、本当にイイナーと思

っています。今は、サロン紙を読むことによってサロンの皆さんとふれあいをしている様な感じですか。いつもサロン紙を送っていたら、ありがとうございます。ま、サロンに行ける時がきましたら、また参加しますので、その時は、よろしく願います。

サロンで情報交換

竹村定子

サロンの集いに参加(邪魔)させていただいたり、いつも「サロン・あべの」紙を読ませていただいたりしています。

サロン紙の「なんとかしてえな」の欄をみて、自分が何の気なしに行動していることも、障害者の方には失礼なことをしているなと思うことが、たくさんある事を知りました。まだまだわからない事はばかりですので、今後いろいろな情報交換をし

て、みんなで明るい地域社会に一步づつ進んでいける様に努力したいものだと考えています。「サロン・あべの」(紙)五周年ほんとうにおめでとうございます。今後も益々のご発展をお祈り申し上げます。

おめでとう

田中美智子

五〇号記念紙発行おめでとうございます。

芽生えまでの皆さんの努力をたたえ、惜しみ無く拍手で祝った先駆的なグループ「サロン・あべの」誕生の日の光景が蘇ります。

今、どっしりと地域に根を張り、出会い ふれあい 助け合い、共に生きる場の提供をしている「サロン・あべの」の成長を、ファンとして敬愛のまなざしで見上げております。



情報一杯の「本」？に

田中 真知子

△サロン・あべのV五周年、おめでとうございます。

この一年、いつも楽しみに読ませていただけていました。

色々な体験や、お知らせ等、今迄に知らない世界の事ばかり(すみません)、大変いい勉強をさせてもらっています。

これからは、少しでも参加出来ることがあれば、どしどし参加させていただきたいと思っています。

△サロン・あべのVも、これから増々楽しく、色んな情報一杯の本？にしていって下さいネ。

体がついて行くかぎり

塚脇 えみ

サロン・あべの五周年記念、お目出度うございます。娘を何とかして暗い生活から明るい光の中に送り出してやりたいと何

時胸を痛めて居りました。病院勤めをして居ります私は、看護婦さんのちょっとしたきっか

けでサロン・あべのとお会いしました。けれどおじける娘をつれて出かける事はむつかしく気がつきましたら私が皆さんの仲間に入れていただけていました。

明るい皆さんの顔を見ていますと年老いて行く自分が若くなっ

て行く様です。年よりが一人、皆さんの中にまじってちょっと場違いの様ですが体がついて行ってくれるまで、参加したいものと思つて居ります。すばらしい出会いにめぐり合つて、とても嬉しく思つて居ります。

皆さんお体に気をつけてがんばって下さい。

ありがとうございました。

離れ難い サロン

出口 正敏

出会は、社労士受験準備中、

「ノーマライゼーション」の言葉を知り、やがて合格。開業してすぐの頃、年金講座を受けたときである。その言葉を地で生きて居る皆様の目のあたりに見て感銘しました。

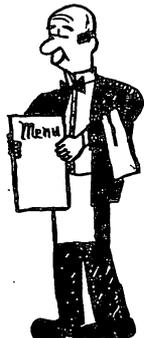
いま、仕事上出席できないが離れ難く結びつけて居るのは、△サロン・あべのV紙である。

皆様の努力の成果が定期発行となり、その活動を十分にアピールしていると思われる。『サロン・あべの』五〇号万歳！

成長するサロン

匿名

△サロン・あべのV五周年お目度でございます。障害をお持ちの方々が毎月テーマをきめて集って必ずその時々のお会い・ふれあいの数々を憶する事なく発表して、今では教えられることの多い立派な機関紙に成長されました事、心からおよろこび申



し上げます。この記念行事をよ
きステップとして益々のご発展
を祈念致しております。

お風呂の話にショック

中川 雅子

サロン・あべの五周年おめで
とう。一人一人の真実の声が、
強い力が結集した同紙は、読者
を圧倒し、あらためて命の大切
さ人間性を問われる大きな小冊
子です。

私は埼玉県に住んでいます。
こちらには、わらじの会のみな
さんがボランティアの力を借り
て生活をされています。

最近一人の篤志家の方の力に
より共同生活の場を完成したそ
うです。多くの問題が残り、ス
タートから困難をきわめていま
す。先日街頭で会の方の声を聞
きました。一年もお風呂に入れ
なかった話は、お風呂好きの私
には大変なショックです。毎夜

ぼくにとつての

「サロン・あべの」五周年

大阪市立大学講師

牧 口 一 二

あの日から——もう五周年な
のですかア。やっぱり光陰矢の
如しなのでですね。ぼくにとつて
「あの日」——つまり、「サロ
ン・あべの」発足記念パーティ
の日は、一生忘れることができ
ないのです。

じつは、その数年前から「障
害者の立場からナマの発言をせ
よ」と、私にも人前で発言を
求められて、年々、人前で話を
させていただく機会が増えてい
きました。障害者のナマの声とい
っても、ぼくはただ一人の障害

者にすぎないと思いつつも、与
えられた機会に精一杯、話を聞
いていたのだと思います。

そして「あの日」。発足記念
にと、ぼくの話聞いていただ
くことになったのですが、ちょ
うど、機会が増えり慣れりがあ
ったのでしよう。ともすれば、
障害者問題や人権のことは重く
沈みがちで、その空気を変えた
くて、リ冗談めかしりに不遜な
ことを口走ってしまったのでし
た。（もちろん内容もよく覚え
ていますが、ここではごかんべ
んください）その後、ほんとう
に数多く、人前で話をさせて
いただく機会は、増え続けてい
るのですが、「あの日」を肝に
命じつつ、話を聞いていただい
ています。もし「あの日」の失
敗がなかったら、ぼくはもっと
大きな失敗をしていたでしょう。

「サロン・あべの」はあの日
からぼくを支えてくれているの
です。みなさまには申し訳けな
いことをしておきながら、いつ
かお詫びをしなればと、思い
続けていました。

何ごとにもリ慣れりはいけな
いと、初心にかえしてくれるの
が「あの日」です。けれども
リ初心を忘れないリというのも
難しいです。私達大人がいつま
でも子どもの素直さではいられな
いように、数を重ねる、年を重
ねるといふことは、やはり発足
時とはひと味もふた味も違うこ
となのでしよう。初心を忘れな
いで、しかも年を重ねることの
値打ち。そんなことを、いつも
考えながら、何ごとにも精一杯
やっつけていこうと思っています。
「サロン・あべの」ありがとう
うございます。

あったかいお湯に入るたび心が
いたみます。

サロン・あべのの皆様、読者
の皆様、健康に明るくお暮らし
下さい。同紙がもっと多勢の人
達に読まれることを希望します。

文を書くのはにがてです。文に
なっていないと思いますが…。

おめでどう五周年！

中野 君江

「サロン・あべの」今年で五
周年を迎えられました由、おめ
でどうございます。

私とサロンとの出会いふれあ
いは一年半余り前。本当に見す
知らずの方からの一瞬のふれあ
いの出来事だったので。今思
えば、その事を感謝しておりま
す。

四〇才過ぎてからの発病に、
目の前が暗く生きる力もなくな
りましたが、親としての自覚、子

供の教育、嫁として主人の海外

出張の留守を守る大任に、自分

の体の養生どころではありませ

ん。両親同居の嫁の身はゆっく

りも出来ず、じりじり悪化させ

るばかり。入院治療すれば全快

するやもと思っても、子供の事

を考えると心鬼にもなれず、薬

をのむだけで月日が流れ去って
しまいました。

「サロン・あべの」を知り、月

一度のふれあいに、なるべく出

席する。同じ障害の身を、心か

らたのしくおしゃべりが出来、

色々な事を勉強し、勇気を出し
て挑戦出来る様になりました。

又、皆さま方の事にも感心さ

せられています。南光さんご夫

妻のハワイ旅行記、毎月たのし

みに読ませていたゞきながら、

私も何時か海外へ出かけられる

と夢をもちました。

サロン紙の一ヵ月毎の発行は、

お世話下さいます方々のご努力

と感謝いたします。と共に、何

時迄も永く続けて発行して下さい
ます様に、お願い申し上げます。

なんとか 載せてほしいの

松葉 玲子

△サロン・あべのVがありがと
うございました。それと(a n
d a n d)∴五周年まことに
おめでどうございます。今月号

も楽しく拝見しております。

ちょっと見てやっていただき

たいのですが、なんとかしてイ

ラストにのろうとあつかましく

も、らくがきを仕事中心にしてし

まいました。一度石田先生にチ

ェックしていただきたく同封い

たします。いまいっぽの時は、

又、ご連絡お待ちしています。

どうも、お忙しい中くだらん
おたよりですみません。

おめでどう

松本 孝

サロン・あべの紙発行五〇号

おめでどう。いつも割に簡単に

拝受していたので申し訳けな

が満足に読んでなかった。けど

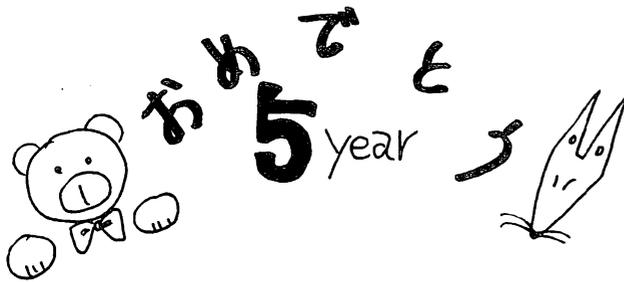
子供の頃捕まえた甲虫の様に大

切に保存し、いつかじっくり観

察しようと思っていた。節目な

ので何か書いてくれと頼まれ、

慌て、取り出す。何と珠玉の言
葉が各号各頁に溢れていること



か。これは汗顔。読まずに死んだら大損だった。今後はしっかりとよませていたゞく心算。

皆様のご努力でますます光り輝いて下さい。

温かい出合いを求めて

丸山 寿美子

私が初めてサロン・あべのに出会ったのは、毎日新聞紙上でサロンの集いを知って参加した時です。そこでのサロンの話し合いは、一般の人が考えているものではなく、障害者も健常者も一緒になって話合える温かい雰囲気での会でした。その時の感動が余韻となって、出来るだけ会に参加して皆さんの話を聞きたいと思うようになりました。

今後も、出合い・ふれあいを求めて、お互いの理解を深めていって欲しいと思います。

私も時間のあるかぎり、サロンに参加していきたいと思って

います。

オメデトウ、オメデトウ

まんだに よしゆき

セルフ社の井上さんと知り合ってから酒の量がとても増えてしまいました。「サロン・あべの」と知り合ってから根性持ちの友達がとても増えてしまいました。今の僕、嫁はんの居無いくことを除けば、幸福です。オメデトウ、オメデトウ、「サロン・あべの」五周年！
宝クジ当たったら皆で飲もうぜ。

サロンの輪 拡がれ

柳生 幸子

五周年 おめでとう！

初めてリサロン・あべのの紙を読んで感じたのは、温かさとして伸びようとする勢いでした。

この事は以前、町野旬子さんも書いていらっしやいましたが、

私も全く同感です。

これからも温かい紙面を通して「出合い・ふれあい・助け合い」の輪を広げ、地域から全国に、そして世界に伸びて下さい。

出合い様々

山本 鈴子

出合いと言っても、楽しいばかりではないと、最近知りました。その一つが落書き。地下鉄昭和町駅が工事中でベニヤの壁になってる所があります。その壁に足跡がペタペタ付いています。床から五〇センチ程上がった所ですので、故意にしたとは思えません。公共の場所はお互いに気持よく使用したいものと思います。

もう一つは、怖い出合いでした。交差点を青信号で横断中、曲がってきた車に接触されました。幸い電動車椅子に乗っていたので、少し破損したかなという程度で動きますし、体も大丈夫

です。

夫でホッとしましたが、当った車はそのまま行き過ぎようとしてました。連れの人が追いかけて話をし、名刺をもらうことが出来ました。交通ルールを守ることと、ささいな事故でも、一言声を掛けてくれる思いやりが運転される方に欲しいと思います。

ハンパじゃないよ

山根 匡子

ハンパじゃないよ。いつも感じます。サラッと目を通しただけでは、終れないのです。

「ウーン、私は……？」と自分の考え方、生き方まで、考えさせられてしまうことがあるのです。

でも、決して窮屈ではなく、楽しい話題も数多くあります。川しなやかで、パワフルという感じで、毎号、楽しみにしています。

つぎの5年がまた、楽しみです。

サロンであんなことがしたいねえ、
こんなサロンであればいいなあ、
こんな集いも楽しいんじゃない。
うん！ うん！
これから先どんなサロンになって
いるか、
つぎの五年がまた、楽しみです。

☆ 五周年にあたって

旭 純子

このたび「サロンあべの」が五周年を迎えるにあたり、参加者のひとりとしてとてもうれしく思っています。

何だか信じられないようだけど、もう五年もたつんですね。私はサロン設立委員会当初からのおつきあいなので、準備期間も含めてもう六年以上の関わりになります。

当時大学生であった私もこの間に卒業、就職を経験し、さすがに時の重みを感じます。

サロンに対する興味は手話を始めて二年目であった私の「もっと色んな人達と交流したい」という思いから出たものでした。

それで、「色んな人達の交流を目的とするグループの設立に向けて動いている人達がいる」という、当時、あべのボランティ

ア・ビューローのコーディネーターをされていた岡さんの話にふたつ返事でつたのでした。

この五年間に実にたくさんの人達との出会い、ふれあいがあり、助け合いの輪が「サロンあべの」を布石として広がりがつつあることは、年々品数のふえるあべのカートバル、外出プランでの電動、手動車イス行進、毎回のように新顔の参加者が増える屋内プラン等に如実に表れているように思います。

私が、そもそも現在の「重度肢体不自由者（児）家庭訪問」員の仕事にづくようになったのも、このサロンでの出会いの持つ意味がとても大きいし、サロンで感じたこと、考えたことは仕事をする上でも参考にもなっています。

今は、皮肉にもその「仕事」の忙しさにかまけて運営委員会や例会も欠席することが多くなりましたが：

サロンとの付き合いは私にとつて、物事を考える視点の変化をもたらししてくれました。それまで、手話を通じてろうあの方々とつながりしか持っていなかった私でしたが、サロンで肢体不自由の方、視覚障害の方、多様な年齢のボランティアの方々と交流を重ねるうちに「多様なとらえ方」、つまり、ひとつの物事について色んな角度から考える視点の必要性を教えられた様に思います。

そして、様々なハンディを持った方やボランティアさんの集まりであるサロンにおいて、ろうあの人達との付き合いも今までよりも幾分変わった様に思いました。ろうあの人と肢体不自由の人、ろうあの人と視覚障害の人というサロンならではの交流の

中で、コミュニケーションのあり方も大いに考えさせられました。

障害を持つ人達のハンディの中身、例えば肢体不自由、視覚障害、聴覚障害のどれをとっても軽いか重いかいえる様なことではなく、それは基本的なハンディの中身やレベルの違いであつて、その「レベル」の違いをどうのり越えて人間としての交流を持つていくのかということが、サロンの基本であり、永遠の課題でもあるんじゃないかなあと思つていきます。

参加者のひとりひとりが「お客様」ではなく、二十人集まれば二十人分の、三十人集まれば三十人分の「居場所」を見つけることができるような、そんなサロンでありたいものですね。そういう私も少しは時間をつくつて、心と身体のリフレッシュに、サロンへ参加したいなあと思ひます。

まあ、とりあえず、この「三日坊主」の旭サンが、六年以上も続いているのだから「サロンあべの」は大したところやと思います。これからもみんなで地道に活動が続けていきたいですね。

☆ サロンは何色？

上平 幸雄

サロンを色にたとえると、何色だと思いますか？ぼくは透明じゃないかと思ひます。ある人からサロンのイメージについて、保守的で若さがないと言われました。はじめは「なんでやねん」と思ひましたが、よく考えてみると当たつていふような気がしてき

たのです。紳士淑女、良識、静、地味、円い、中立、そして透明、そんなイメージが、ぼくにも次々と浮かんできたのです。

サロンの発足当時のことはよく知りません。しかし、サロンが障害者自身による新しい形のボランティアグループとして、地域の人や既存のボランティアグループから認知されるためには、透明である必要があったのかもしれない。

障害者自身がボランティアをするという考え方は、健常者、とくにボランティアを長く続けてきたような人ほど、受け入れ難いことでしょう。そのうえサロンの場合は、文、化、面、精、神、面、で、の、活、動、が、主、で、す、か、ら、な、お、さ、ら、理、解、さ、れ、に、く、か、つ、た、の、で、は、な、い、か、と、思、い、ま、す。そのために、過激な

発言や行動を避け、誰からも文句の出ない「良い子」のグループになっていったのではないのでしょうか。

それはそれで、正しかったと思います。しかし、これらのサロンを考えると、もう少し色を出してもいいんじゃないかと思えます。

何をするのか？何を指すのか？サロンがさらに進化していくためにも、ときにはトゲを、ときには毒を出して、自らの存在をアピールする姿勢が必要になってくると思えます。



『サロン・あべの』
☆と私と夢

河合恵子

サロン・あべのが五周年を迎えた。「えっ、もう、あの発足式から五年もたつたの！」というのが正直な気持ち。あつという間に時間が過ぎたように思えます。私は会計を担当しているのですが、この五年のあいだ例会に参加していただいた皆様をはじめ、本当に多くの方々から葉書やあべのカーニバルのバザーへのご出品、そしてたくさんのカンパを頂戴しましたこと厚く御礼申し上げます。おかげさまでサロン誌の発行部数も当初より年々増やすことが出来ました。ところで出会い・ふれあい・助け合いをモットーに和気あい

あいとした雰囲気を保ってきたサロン・あべの。これまで講演や見学会、あべのカーニバルへの参加やクリスマス行事などのさまざまな思い出に溢れています。ですが、とくにわたしにとって心のこったことは二つあります。ひとつは毎号サロン誌に掲載するため、『DEAF MUTE』をワープロで打たせていただいたこと。それまで聴覚障害について考える機会を持つことのなかったわたしにとって、大きな経験でした。そして旭 純子さんがいかに聴覚障害者の福祉を考え、取り組んでいらっしやるのかということを知るとともに行政の必要性についても改めて考えさせられました。それから、もうひとつ。サロンで知り合うことのできた、Yさん・Nさんと「フールド・オブ・ドリームス」を見に行つたこと。それまで空いた映画館で座席の位置を選ぶのは当然だと思っていたのです

が、車椅子だと通路が狭くて難しいのです・・・ね。もっとも野球に熱い思いをたぎらせるといふ映画の内容はとても感動的で最高！もちろん見終わったあとはベチャクチャおしゃべりをして楽しいひとときを過ごしました。

このように私にも多くのひとと出会うチャンスを広げ、そして様々なことを考える機会を与えてくれたサロン・あべの。これまでに参加していただいたかただけでなく、これからももっと多くのかたに、障害のあるなしにかかわらず、気軽にサロンにお立ち寄りいただきたい、お知合いになっていただきたいと思えます。そして雑談やその日の講演をもっと深く突っ込んで話し合っていたら、時にはちよっと遠くへ旅したり・・・そして他のグループとの交流や情報交換もいっそう広がっていけば、と思います。また

これはすでに一部実行に移されているのですが、サロン特製のオリジナルグッズと一緒に作ったり・・・ほかにももっともつと様々なアイデアを出していただいてそれを皆で実現していけたらいいなあ。そしていつの日か「サロン・あべの家」ができて、パソコンやファクシミリ、ビデオやテレビ電話などを設置して、サロンまで来ることができなくても参加したり、連絡を取り合ったり出来るとか・・・夢は尽きることがありません。もっとも、今日のめざましいテクノロジーの進歩をもってすれば決して夢ではないことでしょう。しかし、なんといってもサロン・あべのに必要なのは設備よりもひととの出会い・ふれあい・助け合い。

さて、これから先の五年間。これまでの出会いがどのように深まっていき、そしてまた、どのような新しい出会いが待ちう

けているのか・・・わくわくしています。

☆ガンバリます・・・

山本 篤 江

五周年おめでとうございます。サロンが、出来て以来お手伝いをさせてもらっています。と言っても余り役には？... 楽しい所です。私が、一番いいなあと思うのは、みんなで話合いながら決めていける、そして決めた事は、臆病にならないで進めてゆく。例えば、パネラーを決める時なんて、後から考えると冷や汗が出てくる程。行動派というか、無鉄砲というか。でも、ごりおしはしません。お願いして、先方の都合がつかないようでしたら、またこの次に、お願

いをします。連絡だけはとだえないようにします。そこが、私には大好きな所です。

よくあるグループは、大なり小なり、圧力団体と聞きます。サロンだけは・・・ひと味違う、サロンにしかない味をこれからも出して行けるように、いつの間にかこんなことが出来ていた、これがサロンやねくと多くの人から言っていただける様にこれからも五年、十年、ガンバリます。ガンバリましょう。これからもサロンを可愛がって下さい。



☆サロンあべの振興計画

原田 仁

サロンあべの五周年本当におめでとうございます。

五周年にあわせて何か書くようにといわれて困ってしまったのですが、五年というひとつの区切りですので、もっと楽しいサロンにしていくなための計画づくりというのを考えてみたらどうだろうかと思って書いてみました。でも、これは計画そのものを書いたものではありません。計画はあくまでみんなで話し合いながらつくるものだからです。サロンあべの振興計画というタイトルは冗談です。

計画なんて、と言わずにちょっと読んでみてください。ぜひ

ゆつくりと話し合いながら考えてみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

てみたいテーマだと思っ

を系統的に考える」ということ

で、目標をはっきりするとい

ことが大切なことです。

サロンにも「年間運営計画」

というのがあつて、これは「こ

の1年間にどうやってサロンを

うまく運営していくか」という

目標をもっているんです。しか

し、残念なことに「うまく運営

する」の「うまく」とはどうい

「計画は、できあがった計画書

以上につくる過程が大切である」

といつても過言ではないほどな

ります。

サロン振興計画の目的と性格

計画をつくる時というのは、

結構わかつたような顔をして、

ちよつとすまして「計画をつ

るんだもんね」という感じで始

めるものですが、これが案外わ

サロンあべのをさらに盛り上げていくための方法を考えようとしていくわけです。

サロンの場合は五周年の今、一つの節目として五年間を振り返り、評価をした上でこれから何を考える時であるといえるでしょう。また、五年間でずいぶん参加してくれる人数も増え、いわゆる「サロン」という形としてはどうしたらよいか考えなければならぬ時期であるともいえます。だから、そうしたことをしっかりとわかった上で考えないとはずれな計画になつてしまいます。

それから、計画の性格ということですが、計画といつてもいろいろな種類があつて、ごく大きなものから実に細かいことまで決めたものまで、また、自分たちがどうするかということを決めたものもあれば、他人に守らせるための計画もあるわけです。だから、これがつきり

しないとどんな計画にしたらよいかわからなくて困るわけです。

ここでは仮に、今後のサロンの大まかな方向を定める計画で、これに基づいた細かいとり組みの方法は、毎年の事業計画で具体化するものとするということと、この計画がサロンの運営の方針であるとともに、メンバーひとりひとりに心がけてほしい目標も含むということにしておきましょう。

計画の前提となる社会情勢

何ともたいそうですが、何だかんだいってもやっぱり世間は偉大で、世の中に従うにしても逆らうにしても現実とは現実として認めなければならぬわけですから。そうした意味でひととおりは社会情勢も押さえておくことが必要ですが、ここではまあ一般的にいわれることとして「高齢化社会の進展」「生活や価値

観の多様化」「社会のソフト化」「情報化の進展」「国際化の進展」などをあげておきましょう。

もちろんサロンの場合は「障害者問題の動向」だとか、「あべの」というまちの状況なんかも押さえていく必要があるわけで、細かい話は実際に計画づくりをすすめる中ではみていくことにします。

サロンの現状と課題

計画をつくる上では、現状をよく見つめて、何が良くて何が悪いのかということをはつきりすることというのが大事だということはいまでもありません。結局はここでの「良いところをより良くする」「悪いところは改善する」ということが計画の大筋を決めてしまうということでは間違いないことです。もちろんこのあとで出てきますが「めざすべき将来像」を実現するの

が計画であり、めざすべき将来像というのは、すぐにできるかどうかという短期的な実現性にばかり気をとられないで、あるべき姿を考えることが重要なんですが、それにしても現実の状況から離れることはできないし、また、そうでなければ将来像が「絵に描いた餅」になつてしまふからです。それだけにこの現状と課題というのはみんなの意見をよく聞いて、いろいろな立場から考えておかないといけません。ということですが、

さて、サロンの現状ですが、毎月一回の出会いとサロン紙の発行が活動の中心になつていきます。その他、運営委員会で月一回の委員会を開いている他、必要に応じて打ち合せなどを行っています。また、あべのボランティア・ビューローの一員としての活動も行っているというところですが、

毎月の出会いの内容は、こゝ

のところ毎年定例的になつてきました。テーマを決めての学習会、見学会、レクリエーション、あべのカーニバルやボランティア交流会への参加などですが、今のところマンネリ化しているという感じはないと思います。むしろ、続けてやってきましたことで、参加者にとつてもひとつの「季節感」みたいなものになつています。カーニバルのバザーにもつてきてくれる品物の数をもつても「継続は力なり」を感じます。

この現状の評価ということは一によつてかなりの違いがあります。一つの意見としてあげてみました。

サロンの目的は、障害者と健常者の交流ということがいちばんなのですが、この点でみると、毎回のように新しい人が参加してくれてメンバーが順調に増えていること、サロン紙のおかげで毎回参加できなくてもずっと

親しみが持てていること、そのせいもあつていつでも来たいときに気軽に来れるという雰囲気が出てきていることなど、サロン活動としてその名にふさわしい活動が広がってきたといえると思います。ただ、拠点となる場所がないということは悩みの種で、月一回というたいへん限られた機会しかもつことができない（これも長く続くひとつの要素ではあるにしても）のは残念だし、日常的なふれあいにはどれだけつなげたかな、というふうには感じます。

サロンの目的としてもうひとつは、地域全体の福祉を高めていくということがあります。そういうことからいうと、交流というのはいま集まってくるということによつてけっこう目的が達せられるところがあるんですが、福祉を高めていくということになると実際に何か行動に移さなければならぬわけで、たいへ

んなこともでてくるんです。つまり、何をするのかを決めないといけないですから、みんなの意見を調整していくということのはしんどいものです。

そういう面から今のサロンをみてみると、せっかくの学習会が知識の蓄積にとどまつていて（これはこれで非常に大切なことですが）、実践への結び付きが少ないのが現状ではないかと思えます。サロン紙の方では「なんとかして「な」のコーナーなんかで、いろいろな身近な問題点がとりあげられているんですが、ほんとに「なんとかして「な」といつてるだけではないんだらうか、自分で「なんとかできる」こともあるんじゃないかとも思うんです。かといって「運動団体」になつてしまつてはサロンの持ち味がなくなつてしまうので、そこはひとつサロンのらしい活動の仕方ついでいうのを探していかなければならないと

思います。

めざすべきサロンの将来像は

さて、ここまでの現況なり課題なりをふまえて、いよいよ計画に入っていきます。まずは大きな目標を明らかにすること、ここで、「めざすべき将来像」を考えてみることにします。

目標をできるだけはつきりとわかりやすく示すことによつて、計画はより効果的にすすめることができます。つまり、計画に書いてあることが何のためにやるのかわかつているのと、わからずにやっているのでは、せっかく同じ努力をしても違う結果になつてしまふんです。

この「将来像」は、私たちのめざしていくものなので、すぐにできるかできないかは別にして、いままでの良いところをよりよくしたものとして、また、悪いところはできるだけ取り除

いたものとして、みんなの「夢」を描くことが必要でしょう。特に計画づくりをする場合に悪いところというのは気が付きやすいのですが、よいところをさらに生かしていくというのは意外と難しいものなんです。サロンらしい個性を伸ばしていくことが大切です。

では、サロンの将来像に考えてみましょう。

まず、サロンの良いところである「出会い、ふれあい、助け合い」の輪はどんどん広がっていきたいと思います。しかし、このままどんどんメンバーが増えていくことがよいことなのかという不安がなくもない。つまり一つのサロンとしてまとまっていくのに適当な大きさというものもあると思うんです。そうなる、サロンとは別のグループとのつながりをつくっていくことによつて輪を大きくすることも良い方法です。ある程度はサロ

ンの中でもいくつかのグループをつくっていくことが必要かも知れませんが、土曜日には参加できない人で「日曜日のサロン」をつくってもいいわけですし、たとえば「なんでもサロンハンズ」などのグループなんかとも協力してすすめていくことも必要になってくるでしょう。

そうした輪の広がりがあれば、サロンの目的である「地域社会全体の福祉の充実」をもっともつと突っ込んで考え、それを実際にすすめていくということもできるような気がします。

「より多くの人たちとの交流をすすめるが、よりよい地域づくりをめざす」。やっぱりサロンができたころの原点に戻ってしましますが、重点を「交流」から「地域づくり」に広げていくということを大きな目標としてめざしていってらどうかと思います。

いよいよどうするかの計画でめざすべき将来像を実現するために具体的な何をどうしていくか、ということが、いわゆる「計画」という部分です。

ふつう、計画という時にはこれだけを思い浮かべる人も多いのだろうと思います。「何をやるのか」を考えるためには、いろいろなことを考えなければいけないということを、ここまでゴチャゴチャと書いてきたわけです。

ここは具体的にやることをあげていくのですから、別にどうのこうのということはありません。ただ、大切なのはそれぞれ計画したことについて、きちんと目標を決めることです。例えば、ただ単に「メンバーを増やす」と書いただけでは、極端に言えば一人でも増えれば計画達成ということですが、本当にそれで良いのかどうか。ここは仮

に「地域づくりの活動をすすめる体制をつくるために、メンバーを増やす」とすれば、どんな人をどのくらい増やしていかないといけないかが考えられるわけです。

サロン振興計画の場合は、将来像であげたように「出会い、ふれあい、助け合い」の輪を広げていくという目標を果していくために、計画の大きな項目としては「1 サロンへの参加者を増やしていく」「2 他のグループとのネットワーキングづくりをすすめる」「3 地域とのつながりを強める」などが考えられます。

そして、大項目の「1 サロンの参加者を増やしていく」を具体化するためには、小項目として「①新しい参加者を増やしていくように、広報や行事などでの呼びかけを強化する」とか、「②市民の関心が高い問題についてのイベントを開催する」と

か「③以前参加してくれた人にまた参加してもらおうように呼びかけを行う」など、みんなのアイディアを出していけば、計画はどんどん広がっていくでしょう。

「計画なんて大げさで、サロンにはそんなものはいらないんじゃないかと思われる方も多いでしょう。楽しいグループなので、変に堅苦しい計画でしぼってしまうことは、むしろ良くないことだと思います。」

でも、私がいちばん言いたかったのは、初めにも書いたとおり「計画はできあがった計画書以上につくる過程が大切だ」ということなんです。夢や問題などをゆっくり話し合うこと、それも無責任に言い合うだけでなく、自分が何をしたいのか、何をしなければならぬのかを考へて、世間話ではなくて自分の

問題として考えるということ。このことがとつても大事になってきています。

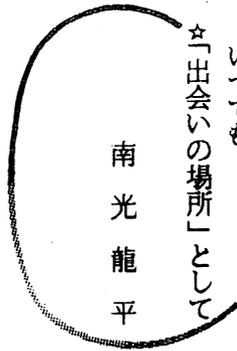
計画づくりは話し合いのきつかけという意味で大きな意味をもっています。

これからのサロンを考えていく上で、何か参考にしていただければ幸いです。

いつでも

☆「出会いの場所」として

南光龍平



例えば「あれをしなければ」とか、「こうでなければ」とかいう「努力目標」の会じゃなくて、いろんな人が集ってきて、いろんな出会いがあって、いろんな話ができるところ。ここをおきなく本音で語りあえる場所を提供する。最近めったにお目

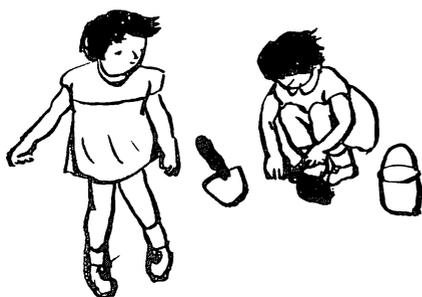
に掛らなくなった、そんな空間を創り出せたら、もっと素敵。「サロン・あべの」になると思いませんか？

そしてそんな出会いの空間が、一ヶ月一度だけじゃなくて、二

ひとこと ふたこと

ひとことふたこと そつとことばをかわしてとてもすてきなあなたかえがおをかわしてころのなかにあるなにかを かりあってまっすぐにすみきたひとみでみつめあってそのままのじぶんをかくすことなどしなくてあいてのころもぜんぶまるごとうけてめてそんなひとたちが いつもつどいあっていちにちいちにちあたらしいであいがあってそんなすばらしいことつないでいくものってきつとさろんにあつまつた てとてとて





サロンがあるまち

前田 博子

「サロンあべの」五周年、おめでとうございます。そして、この5年間「サロンあべの」の活動を記し続けてきた「サロン紙」五十号、本当におめでとうございます。

私が初めて「サロン」と出会ったのは、ちょうど「サロン」

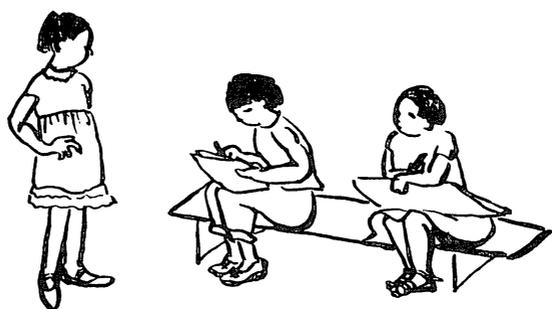
が独立したグループとして産声をあげた直後だったようです。

当時の私は大学を卒業したばかりで、今後の自分の仕事への不安と期待と夢をどっさり抱えていたように思います。もちろん、

一番大きかったのは不安でした。学生の中から、一応「地

域福祉」を勉強し、自分で望んであべのボランティア・ビューローのコーディネーターをやらせてもらおうと決心しました。

一人しか職員のいない環境で、この頼りない私に仕事ができるのだろうか、と心配したのは私一人ではなかったと思います。



「サロン」のメンバーも、さぞや不安だったろうと、申し訳なく思っています。(なんてったって、不安のあまり半べソかいて前コーディネーターの岡氏に相談にのってもらってたりしていたんですから。)

そんな頼りない私が、なぜこの仕事を選んだかという、とても可能性のある仕事だと思っただけです。学生時代、「地域福祉」のさまざまな側面を学び、本当に地域の福祉力を高めていく最前線にいるのはボランティアだし、この分野を度外視して本当の地域福祉は有り得ない、などと思っていたからです。あべのボランティア・ビューローで、行政主導型でも、サービス供給型でもない、本当のボランティアを育成していく仕事をやってみよう、と当時の私はかなり意気込んでいたかもしれませ

ん。
仕事柄、「ボランティアって

何?、どんな人?」と、よく聞かれます。場面に応じて、質問者に応じて、いろんな答え方をしてきました。一口にはとても答えにくい質問なのですが、その人の「ボランティア観」をいちばん端的に表現してもらおう質問でもあるかもしれません。以前、「一般の区民よりも少し勇氣があり、少し行動力のある人」という意味の答えをしたことが

あります。極端な言い方もしませんが、自分の答えの中ではかなり気に入っているものひとつです。いま、「障害者に

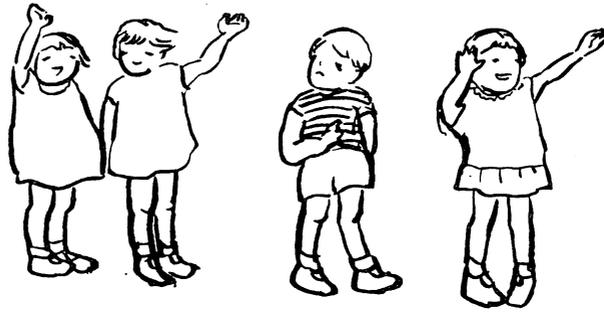
人権を!」「ノーマライゼーションの実現を!」というスローガンに心底反対する人は、もはやいないのではないかと思えます。でも、自分がそんな社会作りを主体的に参加していくか、という話は全く別です。それが、当然のこととして行動に移せる人、移したいといつてビューローに集まってきてくれる人

が「ボランティア」っていうわけです。ボランティアは一人の人間に関することから始めて、だんだんと自分たちの町や生活全体に目が届くようになります。

そんなボランティアたちと一緒にあべのの町について語りあったり、夢を描いたり、時には真剣に討論したり。自分たちのまじのこを客観視し、主体的に考えるきっかけをつくるのがコーディネーターの役目だと思います。

そういう意味で、「サロン」はまことに優秀なボランティアの集まりです。みんなが個性的で、主体的です。コーディネーターによるきっかけづくりもあまり必要ありませんし、その後の活動たるや、どんどん拡がっていつてますから。グループ内でコーディネーターの役割を果たす人がきつと何人もいるんだらうなと思うんです。

もうひとつ、ビューローには



地域住民への啓蒙という大きな役割があります。まさに、「地域の福祉力」の向上を目指すわけです。「地域の福祉力」などという、専門的な言葉のように聞こえますが、意識のうえで住民の「福祉への理解力」と考えればいいでしょうか。具体的に、ビューローの業務としては、福祉やボランティアの情報を地域に流し、関心をもってもらうように働きかけます。なかなか成果の見えてこない部分ですが、コーディネーターの意識の中で、常に気にしていかなくてはいけない部分だと思っています。しかし、本当はボランティアが自ら「ボランティアの輪」を広げていってくれることが、確かな福祉力の向上につながると思っています。

この意味でも、「出会い・ふれあい・助け合い」をモットーとしている「サロン」はとても優秀なボランティアの集まりで

す。「サロン」に一度足を踏み入れるとなかなか抜け出せない、いや抜け出さないからです。自分の関心や目的意識がはっきりしていない人でも顔を出せる雰囲気をもっていますし、そのうちに「サロン」の信条みたいなものが、知らぬ間に身につけていくようなのです。

「サロン」の活動は、阿倍野の人たちの「障害者観」（あまり適した言い方ではないのですが、適当な言葉が見つからないのでこのまま使います）を変えてきたと思います。決しておしきせではなく、自分たちの活動を通して、できるところから、できる範囲で着実に変えてきたと思います。何よりも、当事者と健常者（これもあまり適した言い方ではないのですが…）が自然に座を同じくしているよさが十分に生かされているんですね。ビューローが一番助けてもらっている部分です。ボランテ

ィアの援助を求める障害者の中には、どうしても当事者の立場からしか見えない問題を抱えている人も少なくありません。私たちがわかっていても、指摘できない問題というのもし少なくありません。そんなとき、頼りになるのは「サロン」です。「サロン」のメンバーに相談すると、とても新鮮な答えが返ってきて、納得のいく方法で対処してもらえることが多いのです。コーディネーター仲間からは「あべのはサロンがあるからいいわね」と言われ、「いいだろう」と自慢できるのです。

そんなわけで、ビューローと「サロン」は切っても切れない関係で（いや、切つて欲しくないと思っているのはビューローだけかもしれないのですが）これからも、ビューローとのうまくい二人三脚を続けていっていただけることを切にお願いしたいと思います。

もうひとつのサロン

岡 知史

△はじめに▽

五周年、そして五十号記念誌、おめでとうございます。サロンが大きく発展してきた証だと思います。

さて、この五十号記念誌に、サロンのこれからのことについて、いろいろ書いてほしいという編集部から言われたのですが、サロンにふだんから参加していないぼくとしては、あまり役にたつようなことを言えそうにはありません。

しかし、サロンと同じように、地域で障害をもっている人ともっていない人の交流をすすめているグループは全国にたくさんあります。私も、そのいくつかに参加したり、そこにかかわっている人の話をきいたりした経験があります。

ここでは、その経験をもとに、サロン活動がうまくいくためにはどうすればいいかを考えたいと思います。

そして、話の進め方として、活動がうまくいっていないグループの話をまずしたいと思います。そのグループは、わが「あべの・サロン」と同じような目的でつくられた、いわば「もうひとつのサロン」です。その「サロンの」の失敗談から、「あべの・サロン」の今後の活動について考えてもらいたいと思います。

なお、これからお話しする「もうひとつのサロン」は、架空のものです。話をわかりやすくするために、いろんなケースを組み合わせさせてあるのだと考えてください。

△健常者がいなくなる▽

ぼくの知っているグループの低迷化は、会合に参加する健常者が減ってしまったことから始まりました。

一般に、障害者をグループにひきとめるよりも、健常者をひきとめておく方が難しいようです。健常者は一度顔をみせても、おもしろくなければさつさと立ち去ってしまいます。他に行くことができるグループが、いくらでもあると考えているからでしょう。

一方、障害者の方は、外出も困難な人が多く、週末の予定をもっている人も少なかったのです。家庭や忙しい仕事が多かったため時間がありませんでした。出かける先もあまり多くはなく、一度、会にでると続けて出てくるようでした。

おもしろくなければ、健常者は次の回には来なくなりません。しかし、障害者の多くは、会合がおもしろくなくても、それが外出の機会にもなるのでしようか、たいして、休まずに出席しました。その結果、会合がおもしろくなくなると、たちまち健常者の数が減り、相対的に障害者の数が増えることになりました。

△活発な障害者が去っていく▽

また、同じような理由で活動的な障害者の参加も減ってしまいました。家庭をもつていたり忙しい仕事をもっている障害者は、わざわざ週末をつぶしてまで、おもしろくない会に顔を出さなければならぬ理由がないというのです。

こうしたことが続くと参加する障害者の性格が変わってきます。どちらかというと、外出の機会がなく、週末にいつしよに過ごす友人もない孤独な人が多くなります。例会の日には、誰も健常者が来ていないころから集まり、黙って座っています。もうすでに何人か集まっているのですが、目の前にいる人と話しをすることもできません。人と自然に話すことが苦手な人たちが残るのです。

△人づきあいの下手な人が残る▽

健常者の数も、活発な障害者の数も減っていくと、グループはますます「沈滞化」してしまいます。そういうグループは、たいいていの健常者や他に外出先をもつている障害者を魅きつけないから、悪循環がおきるのです。それでもグループが、自然消滅という形にならないことがあります。つまり、それは実際に「そこにしか行くところがない」という人が何人もいるからです。

これは外出の機会の少ない障害者に限りません。会社と自宅を往復するだけで他に友人がいないという健常者も、必ずそういうグループに残ります。もう何カ月もすごしてきたグループを、そんなにあつさりと諦めることはできないのです。今回つまらなくても、次回はきつと楽しいかもしれないと期待して、会への出席を続けます。そして結局、人づきあいの下手な人ばかりが残ることになるのです。

△あたたかさがなくなる▽

グループには、それぞれ「気温」のようなものがあります。自分たちのグループが、どれくらい「気温」なのか、いつも点検してみる必要があるでしょう。みんな熱心すぎて、グループが熱くなりすぎて、何人かの人はとてもついていけないと止めてしまうことがあるかもしれません。

しかし、たいいていのうまく行かないグループは、その逆で、「冷たい」「寒い」グループなのです。グループの雰囲気としては、誰も十分、十五分としゃべらなかつたり、そうかと思えば、誰も聞いていないのに、ひとりだけが長々と話すようになります。顔ぶれは固定化し、あまりにつまらないので、外から見ると「苦行」のような会合になるときもあります。何かを提案しようとしても、冷たく笑われてしまうような雰囲気です。互いにまらでいじめるような質問が出るときがあります。

△職員なしではやっていけない▽

サロンのようなグループは、たいいてい、ボランティアセンターや、社会福祉協議会など、地域福祉に関係する機関とつながりをもっています。

はじめのうちは、その職員が中にはいつてグループの援助をすることが必要になることが多いものです。

でも、いつまでたつても、職員の援助なしでやっていけないのなら、グループとして一人前ではないということでしょう。

うまくいつていないグループは、担当の職員がくるまで、じつと黙って待っています。誰も自分たちで司会を

決めて進めようとは言いません。グループ全体で雑談することもなく、隣同士で、まるで悪いことをしているようにコソコソと内緒話をする感じですよ。

また、グループが今日のプログラムが終って、各自が家に帰ろうかというとき、そこでグループの状態がみえてきます。黙ってコソコソと帰ってしまう人が半分以上なら、それは良いグループとはいえません。自分だけ仲間はずれになるんじゃないかと、不安そうに黙って立っている人がどれだけいるか、注意してみることが大切でしょう。

△障害者の親がでてくる▽

「あべの・サロン」では、こういうことにはないと思いますが、出席している障害者のなかに本当に自立していない人がいると、その人の親がグループ活動にいろいろと注文してくることがあります。

その親も、グループのメンバーとして参加してくれればいいのですが、問題なのは自分は参加しないで電話で文句ばかり言ってくる親なのです。「息子が近ごろ、グループはつまらないと言っている」「**さんが、今回グループの役員に決ったそうだけど、娘は**さんがいいと言っている」といったものです。

人前で話すことができない障害者が、その親を通じて、グループのリーダーたちにいろいろ苦情をいうということは、よくあることなのです。

△では、どうすればいいか▽

うまくいっていないグループの話ばかりをしてきましたが、では、そのようなグループが自分たちの活動を建て直すためにはどうしたらいいのか、それを考えてみましょう。

もちろん、あらゆるグループに共通した方法もあります。例えば、司会の進め方、新しい人の迎え方、会合の始まる前と終わった後のスタッフの役割などは、それがどのような形のボランティアグループでも同じことです。しかし、障害者と健常者が地域で交流するという形のグループ特有の問題点もあるはずですよ。それをここでは、「三つの誤解」という形でまとめてみたいと思います。

△「平等と対等」への誤解▽

障害をもった人も、もたない人も人間として平等ですよ。それは当り前のことですよ。

しかし、平等とか対等とかいうことの内容は、それほど簡単ではありません。一人一人、人間は個性も違うし生活環境も違うのですから、個人に対する接し方も違ってきて当然ですよ。

たとえば、障害をもったために、社会生活をおくるためのいろんなルールを知らないで過ごしてしまった人もいます。身体的な障害のために誰かの介護がいつもいる人で、親とべつたりの生活をしている人がいます。生活が一体となつていても問題はないかもしれませんが、精神的にも親とべつたりしては、いつまでも大人になれません。特にグループ活動などでは大人として振舞うことができないと思います。

そういう人には誰かの支えが必要です。いままでずっと家に閉じこもっていた人が、突然、会議のような席で自分の意見を言うことは、ほとんど無理だといっていいでしょう。人の意見を聞いたたり、話し合つて意見を調整していつたりする仕方を知らない人は、案外多いものです。意見の違いを明かにすることを恐れ、黙つてしまつたり、自分の意見に反対されると自分は嫌われているのだと思ひ込んだりしやすいのです。

みんな平等、対等なのですが、やはり支えや導きを必要とする人は必ずいるのです。それは、障害者だけとは限りません。障害のない人にもそのような人はいます。平等、対等なのだからといって、誰に対しても同じような態度をとることは、かえつて冷たい態度になつてしまふことがあるのです。

△「障害」への誤解▽

障害をもつている人ともたない人の交流の場合、障害に対する誤解を除く必要があると思ひます。

特によく見られる誤解は、障害をもつた人はコドモなのだという誤解ではないでしょうか。

女子大生で、初めてボランティア活動をするという人を見てみると、三十近くになつてゐる男性の障害者をつかまえて「***ちゃん」と呼ぶ人がよくいます。そこままでいなくても、「***クン」と呼ぶことは多いようです。呼ばれた当人も、男性の障害者の場合は、それが嬉しいのか、ニコニコ笑つてゐることがあります。

ボランティアだけの問題ではありません。「***ちゃん

ん」「***クン」と呼ばれてしまう原因は、本人やその親にもあるようです。例会に本人とその車イスを押す母親がやつてきて、対話している様子、「じゃあ、また迎えにくるからね」と息子の頭をなでている母親の顔を見ていると、ボランティアが「***ちゃん」と呼んだ方がいいのだと判断するのは無理もないことだと思ふのです。

特定の障害者をコドモ扱いしてゐるような健常者には、「この人はコドモじゃないんだからね」と軽く注意すればいいと思ひます。たとえ、知恵遅れと呼ばれてゐる人であつても、オトナとして振舞うことはできるのです。オトナとしての自制、謙虚な態度、落ち着きや威嚇のよなものは、誰でも身につけることができるのではないのでしょうか。知能の発達が普通の人の半分と診断されていても、三十の人を十五のコドモとして扱つてよいはずはありませんし、またいつまでも十五のコドモとして振舞うことが許されるものでもありません。

コドモのように振舞つてゐる障害者には、まさに対等なオトナとして語りかけ続けることが必要だと思ひます。障害者によつては、コドモとして振舞うことが、みんなから受け入れられる方法なのだと思ひ込んでしまつてゐる人がいるのです。そのような人には、自分たちはあなただをコドモ扱いするつもりはないし、オトナとしてあなただが振舞うことを期待するのだということ態度によつて伝えていくことが大切だと思ひます。

例えば、コドモのように騒いだり、ダダをこねてゐる障害者に対しては、笑つてみたり、なだめてみたりする

のではなく、真剣な顔をして「***さん、なにか意見はあるのですか」と聞いてみてはどうでしょうか。

△「健常者」への誤解▽

これは、いま私が特に関心をもっている「誤解」です。障害者と健常者が交流しているグループに参加している健常者に対して、障害者たちは何か誤解をしていることが多いのではないか、というのが私の仮説です。

障害者が、地域で人びとと交流していききたい、交流することによって地域で生きることが求めている、というのとは自然な気持ちでしょう。

しかし、そこに健常者が集まるとき、彼らの動機はなんなのでしょう。なぜ、彼らは、そのような集まりに参加したいと思うのでしょうか。

もちろん、健常者の動機や意欲の背景にあるものが、似たようなものだとは思えません。健常者は、ひとりひとり、まったく違う動機や思いで参加していることが多いと思うのです。ですから、健常者のひとりひとりの心をつかみ理解することの方が、障害者の心をつかむことより難しいのではないのでしょうか。

また、健常者のそのような思いは、直接、面と向かって聞いても聞き出せるとは限らないでしょう。私は先日、サロンのようなグループに参加している健常者に「なぜ、参加しているの」と聞きましたが、彼は「障害者の自立を考えたいから」と答えました。そういうことが彼の本当の動機だとは私には思えません。しかし、彼にしつこく聞いた다는ことは、私がしてはならないことだと思っ

ています。

障害者と健常者が交流をもつというグループの場合、障害者の生活問題、家族の問題など、障害者の問題が中心に話し合われる傾向があります。そういうところに、なぜ障害をもたない人が参加してくるのでしょうか。その理由を考えてみてはどうでしょうか。

健常者たちは、このようなグループのなかでは、自身の問題をさらけ出すことなく、人生の、あるいは生活の問題を深く考えることができる立場にあります。そこで他の人の（障害者たちの）プライベートな問題にも立ちいることができるわけです。通常なら、自分の問題をさらけ出さないかぎり、他の人の問題を見ることは許されないので、ここは例外なのです。そのような立場をなんとも思っていない人もいれば、心苦しく思っている人もいます。また、物足りなく思っている人もいると思うのです。

繰り返し述べていますが、健常者の動機はおそらく多様なものです。彼らが自分自身の問題としていることも、おそらく多種多様でしょう。だから、彼らが自分の問題を口にするのは、グループでは難しいのです。また、健常者の多くは、「障害者がかかえている問題に比べれば、自分の問題は小さいことだ」と思っ沈黙しているのかもしれない。

△他では味わえない充実感を▽

健常者の動機について話しましたが、健常者、障害者を問わず、より多くの人がサロン活動に積極的に参加し

てもらうためには、なによりも、サロン活動で「充実感」を味わってもらうことが大切だと思うのです。

充実感にも、いろんなレベルがあります。

まずサロンの「お客さん」として味わう充実感があります。いい話が聞けた、くつろげる場をみつけた、会って話したい人と話せたというのは、「お客さん」としての充実感でしょう。

しかし、そのレベルでの充実感なら、他でも味わうことができるのではないのでしょうか。講演会はいまどこでも開かれていますし、友達といっしょに雑談のパーティをすれば同じくらいの充実感が得られるでしょう。

サロンならではの充実感は、やはり、サロン活動を自分が支えているんだという感覚だと思います。自分がサロンを担っていて、それでいろんな人が喜んでくれるという充実感。自分にもこんなことができるのだ、自分がサロンの仲間からこんなにも必要とされているのだという気持ち、一番ふかい充実感につながるのではないのでしょうか。

そういうサロンの充実感ができるだけ、たくさんの人に味わってもらうことが大切だと思います。具体的には、サロンの活動を少しずつバラエティに富んだものにしていくこと、それにしたがって、サロンの「仕事」が増えていきます。そうすれば、サロンで充実感を得られる人も増えてくるはず。そして、思い切った自由に、それぞれの人に活躍してもらうことだと思います。

△結びとして▽

いろいろなことをお話ししましたが、このようなことをやっていくためには、メンバーのバランスが大事だと思います。障害者と健常者のバランスもそうですが、社会的に未熟で親とべつたりの生活をしている障害者と、自立してオトナとして生活している障害者のバランスも重要です。健常者の側も、誰かにリードしてもらわなければ動けないような若い学生さんだけではなく、社会経験の豊富な中年あるいは老年の人も参加してもらう必要があるでしょう。女性、男性のバランスもまた大切なかもしれません。

サロン活動は、人が命です。人と場所さえあれば、それでできるのです。それだけに人の問題はたいへん重要だと思います。

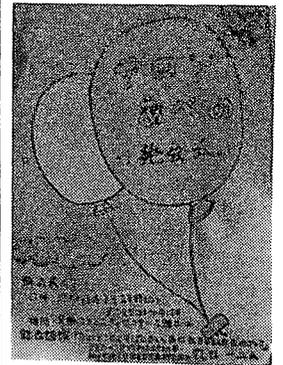
「なんでもハンズ」というグループのことが第四十七号のAあべの・サロンVに載っていましたね。サロンの経験が、そちらのグループにも活かすことができればいいと思います。

遠くからAあべの・サロンVに来てくれる人が、よし、自分たちも地元でサロンをつくってみようという気持ちになって、大阪じゆうにサロンのネットワークが広がれば素敵ですね。そして半年に一度くらい、そんな沢山の「サロン・グループ」が、サロン活動の経験をお互いに交換できるようになれば、夢はどんどんふくらんでいくと思います。

では、これからのAあべの・サロンVの活動がますます充実しますように祈っています。

点から線へ

富田慶子



発会式のポスター

昭和六〇年の夏には、まだハサロン・あべのVの影も形もありませんでした。私はその年の六月に開設された「あべのボランティア・ビューロー」のビュ

ーローグループの一員として、ビューロー活動に参加していました。身近な地域のボランティアさん方と初めて出会い、色々と教えていただき、楽しい毎日でした。

この時、ビューローのコーディネーターだった岡知史氏からビューローに関係している障害者でグループを作ってはと井上・大島氏を紹介されました。話をしてみると三人の思いは、今さら障害者だけのグループでも

ないのでは……。それなら、どんなものが良いのかと各々の想いを出しあいました。

そして、サロンの語義どおりに誰もが自由に自由な話が出来る場所を作りたい、ということになりました。障害者、健全者という枠を考えないで、人と人として話合うことが出来れば、そこには自然に障害者への理解も生れるであろう、お互いに知らずして認識も理解も生れはしないと考えました。そこで、

このような出会いの場を作ろうという事になりましたが、「何々をします」と言える目的を持たないグループ作りというのは雲を掴むようで、委員にお誘いをするにも漠然としていて、人材を集めるのが難しく思われました。が、岡氏がビューローに來られている人に声を掛けて下さり、秋にはサロン準備委員会の形が出来ました。十二月にはビューローのボランティア方との交流会をクリスマス集いとして開催出来ることになりました。この時に集って下さった障害者・健全者の皆様方の言葉に励まされて、サロンはやっていけないのではないかと思いました。

しかし、名前も決っていませんでした。サロンという本来の内容を少しでも感じとれる雰囲気のある集いの場を作っていきたいと考えていただけでした。

年が明けて、いよいよ会として発足する準備段階に入り、色々な名前が出されましたが、どれも馴染みずらい気がして「あべのに作るサロンだから」と言うことで、ハサロン・あべのVと名付けられました。

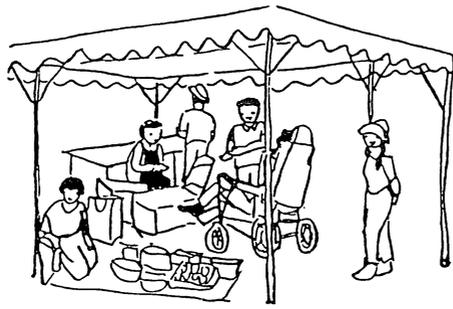
昭和六一年三月二十九日ハサロン・あべのVは、小さな点として産声を上げました。グループ活動の経験もない、組織や運営なんて全ったく知らない者が主になってさせてもらったもので

すから、周囲の皆様にはご迷惑をおかけしていたことと思いましたが、皆様温かく見守り励まして下さいました。又、委員の方々にも恵まれて、専門に活動されていたり、経験豊かな方々の参加を得ましたので、歳月を追う毎に充実した内容でサロンを開催することが出来ました。こ

れに伴いサロン紙も好評となり、参加はちょっと無理だけど、サロン紙だけは読みたいと言って下さる方が増えてきました。人から人へ口コミでサロンの出会いに参加して下さる人、手から手へ渡るサロン紙等、多くの出会いの連なりが出来ました。そして、サロンは楽しいと

言っていただけの時が一番嬉しく、感激します。このサロンの出会いを一本の線として、長く多く伸ばしていきたい。この線をいつかは網の目のように広げていきたいと希っています。年号が変わり、△サロン・あべの▽は、五周年目を迎えました。ここまでこられましたのは

△サロン・あべの▽を励まして支援下さる皆様のお陰です。これからも、初心を忘れず、本来のサロンに一步でも近かずついていきたいと思っています。今後ともどうぞ、宜しくお願ひ申し上げます。

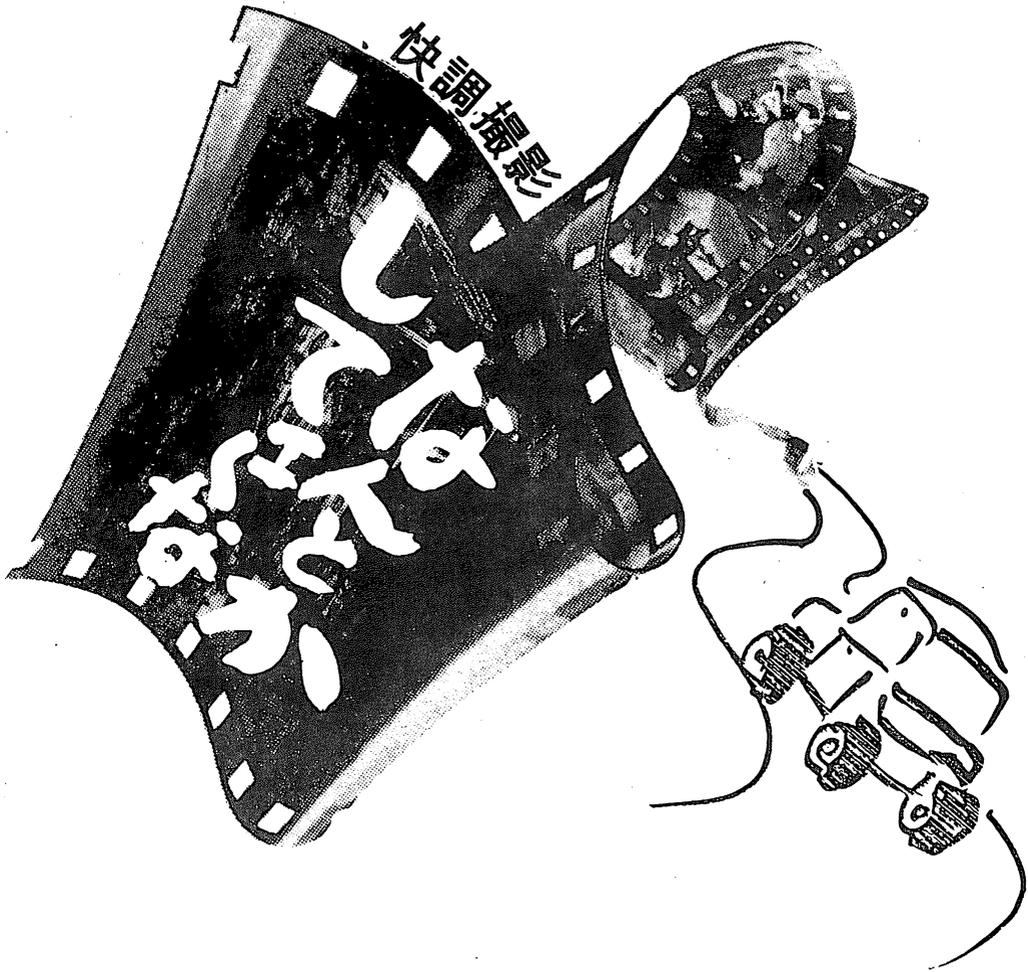


賑わう「なんでも市」(昭和62・8・23)

KSKPサロンあべの通巻1360号1990年8月21日

5周年記念 第2弾

サロンあべの紙好評連載中の「なんとかしてエ～な」がビデオに



乞う！ご期待 91年早春ロードショー

笑い…スリル…驚きの連続。はあるかどうかわかりませんが…

20世紀にはもう出てこない!

企画・製作 サロン・あべの運営委員会

一九九〇年八月二十一日発行（毎日発行）KSKP通巻一三六〇号一九八四年八月二〇日第三種郵便認可
 発行人 関西障害者定期刊行物協会 大阪市東成区中本一丁目三十一番六 べルビュウ森の宮二〇七号

編集人<サロン・あべの>第50号編集: サロン・あべの 運営委員会 定価250円
 (大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 電話06-691-1028 富田慶子)